

小田 C 遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第656集

2000

福岡市教育委員会

「小田 C 遺跡」正誤表 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 656 集 2000

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|----|-------|------------------------------------|-----------|
| 1 | 2 | F 3 区 | C 3 区 |
| 10 | 3 | C 3 | E 3 |
| 17 | キャッシュ | 111 ~ 116:SK304 | 消去 |
| 20 | 14 | SK237 | SK337 |
| 32 | 28 | 堀苑 1997 | 堀苑 1997 |
| 32 | 注 | 堀苑孝志 | 堀苑孝志 |
| 36 | | (3)井戸 366 | (3)井戸 336 |
| 37 | | (5)SK339 | (5)SK539 |
| 39 | | (2)SK499 | (2)SX499 |
| 40 | | 遺物番号 181 を消去。 10、49、181 が抜けている。追加。 | |
| 41 | | 遺物番号 297 が抜けている。追加 | |

P. 10

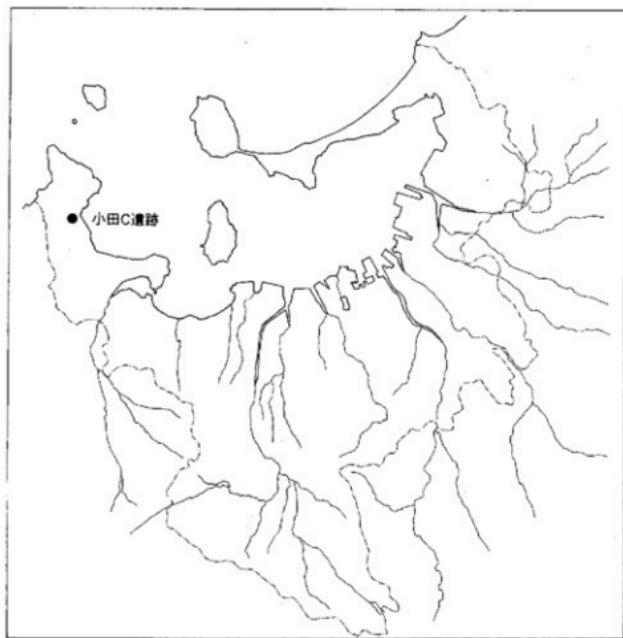


Fig. 10 土器等の出土実測図 (1/500)

K o T a

小田 C 遺跡

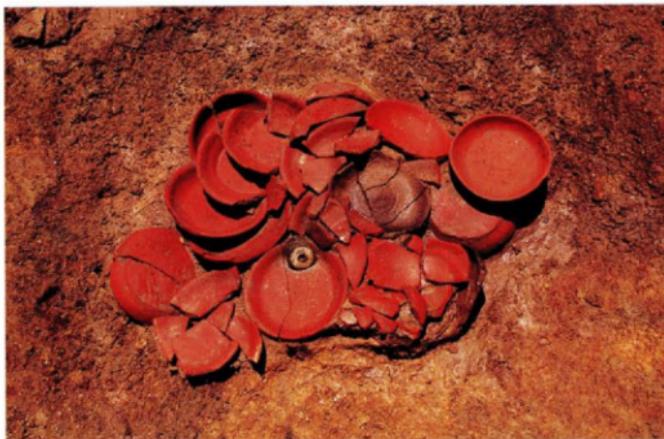
福岡市埋蔵文化財調査報告書第656集



小田C遺跡 1次 調査番号 9808
遺跡略号 KOC-1

2000

福岡市教育委員会



SX499



SX503



中国陶磁器類

1. 2. 23. 48. 70.
141. 181. 219.
249. 403. 325. 339.
322. 391. 408. 409.



朝鮮時代陶磁器類

7. 89. 119. 145.
247. 251. 289. 297. 309.
330. 396. 397.
335. 395. 398. 401

序

福岡県の西北部、玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな自然と先人によって育まれた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現代に生きる我々の重要な務めです。しかし近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は、平成10年に実施した、西区小田地区における排水処理施設建設に伴う小田C遺跡1次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として活用頂ければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行まで、多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対しまして、心から感謝の意を表します。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西 憲一郎

例　　言

- 本書は小田地区廃水処理施設工事に伴い平成10年4月17日から7月24日に発掘調査を実施した小田C遺跡1次調査の報告書である。
- 本書に使用した遺構の実測、写真撮影は調査担当者が行った。
- 本書に使用した遺物の実測は担当者、藏富士寛、井上加代子が製図は菅波正人、井上がを行い、旧石器時代の遺物については吉留秀敏が行った。写真撮影は担当者が行った。
- 方位は磁北で、座標北から621°西偏する。
- 本書の執筆は旧石器時代の遺物について吉留秀敏が、その他及びは編集は担当者が行った。
- 本書に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。
- 本書に用いた陶磁器類の分類は以下の文献によっている。

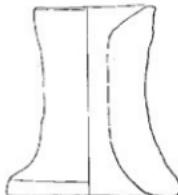
森田勉、横田賢次郎 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4集』

小野正敏 1882「15、16世紀の染付椀、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究No.2』

上田秀夫 1982「14~16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究No.2』

岩崎仁志 1988「防長地域の足鍋について」『山口考古第17号』

| | | | | | |
|-------|-----------------------------|-----------------------|--------|--------|---------------------|
| 調査番号 | 9808 | 事前審査番号 | 9-1-18 | 遺跡略号 | KOC-1 |
| 調査地地籍 | 西区大字小田字ミトリ1204-1他、字木原552-2他 | | | 分布地図番号 | 小田137 |
| 開発面積 | | 1568.01m ² | | 調査面積 | 898.1m ² |
| 調査期間 | 1998年4月17日~7月24日 | | | 担当者 | 池田祐司 |



小田川採集土器（II.10年6月）

（参考.Fig. 2 参照）

本文目次

| | |
|---------------------------|----|
| I.はじめに | 1 |
| 1. 調査に至る経過 | 1 |
| 2. 調査組織 | 1 |
| II. 遺跡の位置と環境 | 1 |
| III. 調査の記録 | 3 |
| 1. 調査の概要 | 3 |
| 2. 遺構と遺物 | 4 |
| (1) 溝 | 4 |
| (2) 掘建柱建物およびピット出土遺物 | 5 |
| (3) 井 戸 | 8 |
| (4) 土 坑 | 9 |
| (5) 土師皿埋納遺構 | 25 |
| (6) 瓦 棺 | 27 |
| (7) その他の遺物 | 28 |
| 3. 小 結 | 32 |

挿図目次

| | | |
|--------|--------------------------------|----|
| Fig. 1 | 周辺の遺跡の分布 (1/25,000) | |
| Fig. 2 | 調査地点周辺図 (1/8,000) | |
| Fig. 3 | 調査区位置図 (1/1,000) | 2 |
| Fig. 4 | 遺構配置図 (1/250) | 3 |
| Fig. 5 | 溝出土遺物実測図 (1/3) | 4 |
| Fig. 6 | 掘建柱建物実測図 (1/100) | 6 |
| Fig. 7 | 建物およびピット出土遺物実測図 (1/3) | 7 |
| Fig. 8 | SE336、SX491実測図 (1/60) | 8 |
| Fig. 9 | SE336、SX491出土遺物実測図 (1/3) | 9 |
| Fig.10 | 土坑集中地点実測図 (1/100) | 10 |
| Fig.11 | 土坑実測図1 (1/40) | 11 |
| Fig.12 | 土坑実測図2 (1/40) | 12 |
| Fig.13 | 土坑実測図3 (1/40) | 13 |
| Fig.14 | 土坑実測図4 (1/40) | 14 |
| Fig.15 | 土坑実測図5 (1/40) | 15 |
| Fig.16 | 土坑実測図6 (1/60) | 16 |
| Fig.17 | 土坑出土遺物実測図1 (1/3) | 17 |
| Fig.18 | 土坑出土遺物実測図2 (1/3) | 18 |
| Fig.19 | 土坑出土遺物実測図3 (1/3、1/4) | 19 |
| Fig.20 | 土坑出土遺物実測図4 (1/3) | 21 |
| Fig.21 | 土坑出土遺物実測図5 (1/3) | 22 |
| Fig.22 | 土坑出土遺物実測図6 (1/3、1/4) | 23 |
| Fig.23 | 土坑出土遺物実測図7 (1/3) | 24 |
| Fig.24 | SX499、503実測図 (1/10) | 25 |
| Fig.25 | SX499出土遺物実測図 (1/3、1/1) | 26 |
| Fig.26 | SX503実測図 (1/3) | 27 |
| Fig.27 | SX586、出土遺物実測図 (1/30、1/8) | 27 |
| Fig.28 | 出土遺物実測図1 (1/3) | 29 |
| Fig.29 | 出土遺物実測図2 (1/3、1/4、1/1) | 30 |
| Fig.30 | 出土遺物実測図3 (1/3、1/1) | 31 |

表 目 次

| | | |
|-----|--------------|----|
| 表 1 | 出土土坑一覧 | 33 |
| 付図 | 小田C遺跡1次調査全体図 | |

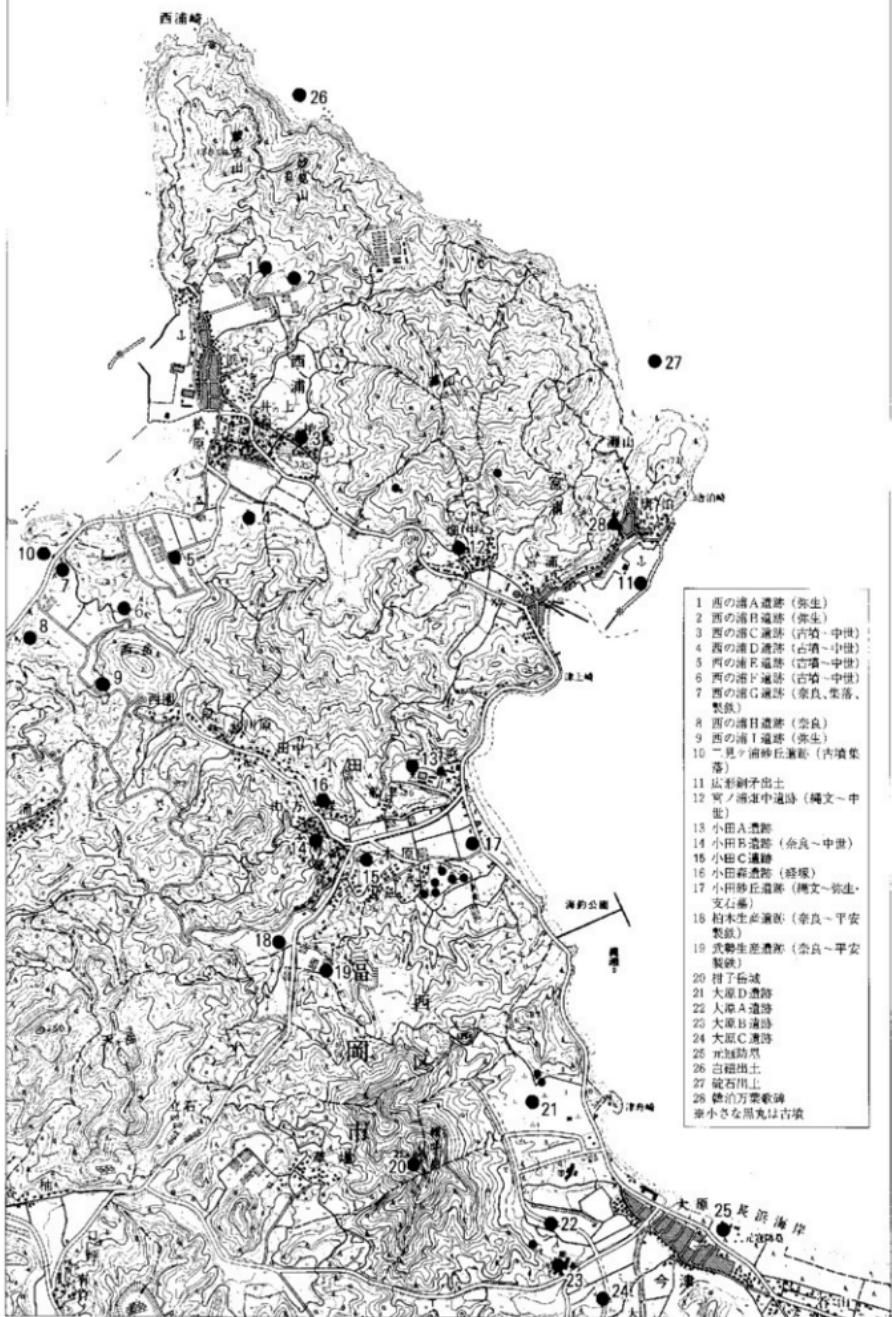


Fig. 1 周辺の遺跡の分布 (1 / 25,000)

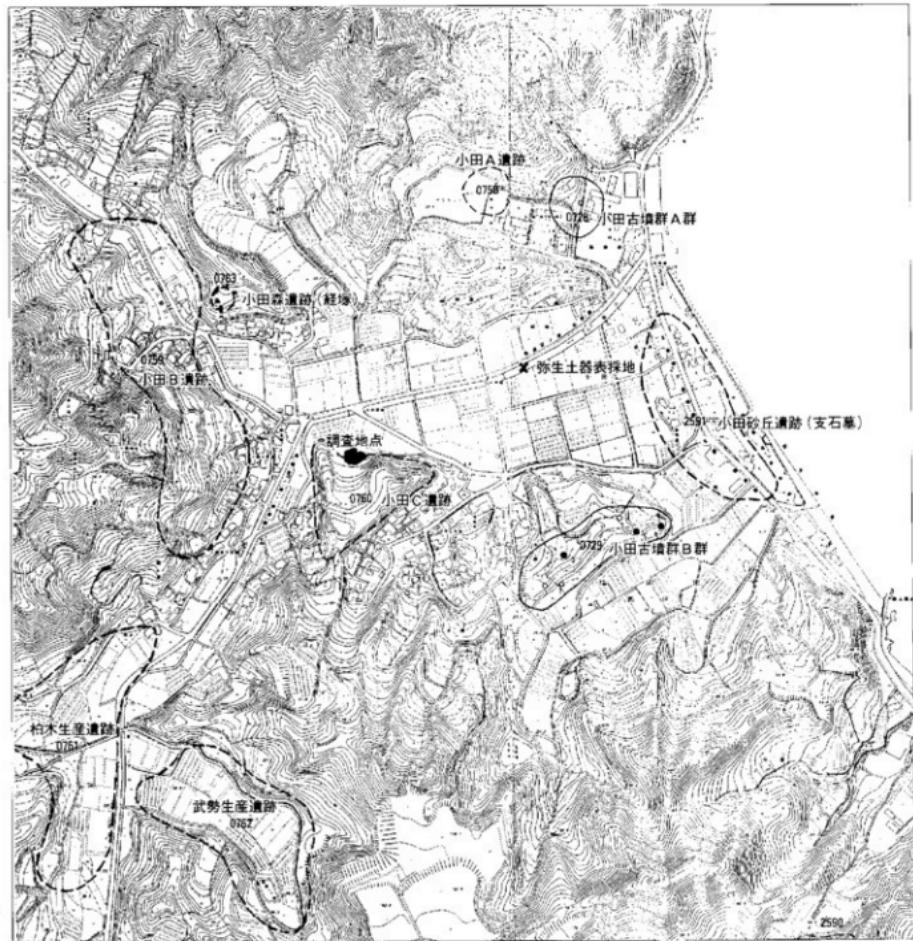


Fig. 2 調査地点周辺図 (1/8,000)

I. はじめに

1. 調査に至る経過

平成9年、福岡市農林水産局は西区大字小田字ミトリ1204-1他地内に集落排水処理施設建設を計画し、当該地について埋蔵文化財の有無確認の依頼を教育委員会埋蔵文化財課に出した。

申請地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である小田C遺跡地内にあたるため、同年12月5日に試掘調査を行い取り付け道路部分をのぞく施設建設部分で中世を中心とした遺構と遺物を確認した。以後、農林水産局と埋蔵文化財課との間で協議を行い、諸事情から本調査を避けられないとの結論に至り、平成10年4月17日より調査を開始した。調査にあたっては町内会長大庭六郎氏、鬼木武士氏をはじめとする地元の方々のご理解とご協力を得た。記して感謝いたします。

2. 調査の組織

| | |
|------|--|
| 事業主体 | 福岡市農林水産局農林部東農業土木課 |
| 調査主体 | 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課 |
| 課長 | 柳田純孝(前任) 山崎純男 |
| 第1係長 | 二宮忠司(前任) 山口穂治 |
| 調査担当 | 池田祐司 |
| 発掘作業 | 西田マキエ 森友ナカ 石田照江 木戸和子 真鍋キミエ 末松美佐子 小金丸ミネ子 徳永千寿子 黒川ギノ 木藤美洋 木藤幸三郎 犬童陽子 近藤ノリ子 堀田昭 友池富美子 鶴田善治 深見伴子 木戸アサノ 柴田種美 那賀久子 徳重忠子 山崎シズエ 柴田シズノ 徳重コマキ |
| 整理作業 | 上田保子 前田みゆき 中原尚美 |

II. 遺跡の位置と環境

小田C遺跡は標高254.5mの柏子岳から北に派生する丘陵の先端に位置し、博多湾に流れ込む小田川が解析した小規模な沖積平野に面する。この地域は博多湾の西側を囲む糸島半島の東側で、市域の北西端にあたる。小田C遺跡周辺では、今まで埋蔵文化財の発掘調査が行われておらず知見は限られるため、やや広い範囲の調査例についてもふれる。

縄文時代では、大原D遺跡（福岡市報481、507集）の丘陵斜面の段丘上で草創期と考えられる焼失家屋が検出され、条痕土器、繩石刃核、石礫等が、周辺からは刺突文土器や、丸ノミ形石斧が出上し、早期では押型文土器、尖頭器が出土している。また、晩期を中心とした大量の遺物が出土する流路が遺跡の中央の谷部を流れ、集落が広がっていたものと考えられる。元岡遺跡3次ではやはり丘陵斜面で押型文、条痕文、刺突文土器が層位的に出土し、集石炉33基等が確認されている。また、この地域は市内では数少ない貝塚が分布し、後期を主体とする元岡瓜尾貝塚は県指定史跡であり、桑原飛梯貝塚（福岡市報480集）では中期から後期の貝塚と墓が確認されている。周辺では宮の浦畠中遺跡（小池1984）で畑地造成の際に後晩期の遺物が表探され紹介されている。

弥生時代では同じ小平野の海岸砂丘に位置する小田文石墓が古くから知られ（鏡山1956）、分布地図では小田砂丘遺跡の一部になる。報告では弥生後期とされているが、今日特に2号については突堤文期のものと考えられている。現在は墓地が若干残る。大原A、B、C遺跡では中期の住居址が確認

され、B遺跡は小藪遺跡（福岡市報541集）として知られている。唐泊沿岸では広形銅矛が海中より発見されている（渡辺1965）。

古墳時代では小田古墳群A群、B群が知られるが数は少ない。これは、分布調査が不十分な事と、丘陵斜面が農地として開墾されていることによると思われる。

古代の糸島半島では製鉄が盛んに行われ、大原A、D遺跡、元岡遺跡で製鉄炉、鍛冶炉が調査されている。小田でも「砂鉄を産した」（地理全誌）とされ、周辺では武勢生産遺跡、柏木生産遺跡が知られている。これらについては筑前続風土記小田村の項に「村の西の山邊に、地をほれば 器の鋤の筒の如くなる物出るところあり。又草場村との境ニ全と云谷をほれば、金落多く出づ。いかなる故にかかる物残れりといふ事しらず。」とあり、古くから認識されていた様である。また、北2kmに位置する唐泊（韓亭）は、遣唐使が立ち寄る港としても知られ、ここで詠まれた歌が万葉集に見られる。

中世では元寇防塁の調査が行われ、今回の調査で多く出土した瓦質の足鍋、播鉢が今津元寇防塁周辺、大原D遺跡で少数ながら出土している。室町、戦国期の志摩は大友氏の支配下にあり水崎城、桔子岳城等の城塞が構えられ、怡土に本拠を構える大内氏幕下の原日氏との間で戦闘が繰り返されている。

調査地点は、旧地権者の話では調査区の西側の斜面で「壇」が出たとのことである。

月原益軒編『筑前続風土記』
小池史哲1981『糸島の純文化、『三雲道跡Ⅱ』福岡県教育委員会
渡辺王氣1965『福岡市唐泊海岸新発見の銅矛』『九州考古学17』

鏡山猛1941・42『原始積式石棺の変相』史測25・27

福岡県1866『福岡県地理全誌』

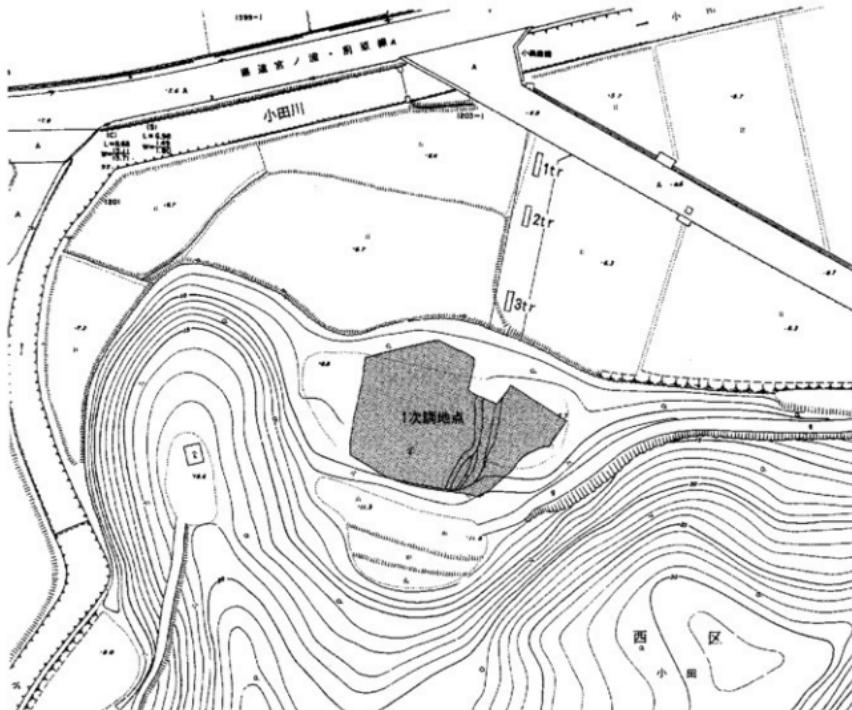


Fig. 3 調査区位置図 (1/1,000)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

調査地点は小平野に面する丘陵の先端部が小さな谷状の地形を成した部分に位置し、南側、東西を丘陵に挟まれ、やや奥まり閉ざされた空間にある。調査前は盛り土の上でビニールハウスが営まれていた。造構面は標高8.1mから7.5mで北側の水田より約1mほど高い。南側80mに丘陵の小頂部の標高が30.8mである。調査区との間は現在は竹藪であるが、戦後すぐまで段造成された農地であった。調査地点の盛り土は約1.5mほどであるが、旧地権者の方の話によると他所からの土砂の搬入ではなく、盛土状の堆積はすべて丘陵部からの流入によるとの事である。今回の開発まで車両の進入路はなく耕地造成の際の排土と考えられる。

調査は重機で表土を掘削し、土置き場の都合で上砂を東西に反転しておこなった。調査は東側から行い、暗褐色土の遺物包含層を除去した黄褐色土上面で造構を検出した。調査区には便宜上Fig. 4の様に5mグリッドを組み、以下、区と呼称する。造構は調査区中央東よりを縦断する溝があり、その東側では大小のビットを多く検出し、建物を想定した。溝の西側では土壤を多く検出し、特にC、D、E-1、2、3区では上坑が密集している。これに対し、B、C-3、4区のように造構がまばらな箇所もある。



Fig. 4 造構配置図 (1/250)

遺物は遺構に伴う物としては、13から16世紀までの陶磁器、瓦器、土師器が主体を占め、足鍋が目立つ。また、旧石器時代に遡る石器、阿高系の土器片、弥生中期土器、古墳時代から古代の須恵器も少量ながら出土している。

遺構検出面以下はC-6区で深掘りしたところ、砂質土、シルト、粗砂層が堆積し280cm下の標高約5mで花崗岩のバイラン土に達した。この間重機による掘削ではあったが、遺物は確認できなかった。花崗岩バイラン土はE-8区で標高9mで現れており、急激に落ちている。

2. 遺構と遺物

(1) 溝

調査区中央部分に傾斜に沿って走る溝を5条検出した。

溝1 東側に弧を描いて走る。検出した溝のうち最も深く、断面逆台形を呈す。覆土は灰茶褐色砂質土を主体とし、均質で一度に埋まった様である。底には粗砂が溜まり、水流があったと考えられる。深さは30から70cmを測り、底の標高は南端で7.2m、北端7.0mである。

出土遺物 1から22が出土した。1は染付碗C群で豊み付きが露胎、2は染付皿C群である。3は青磁碗で淡灰色を呈し器壁が厚い。4は白磁で灰色を帯びる。5は龍泉窯系の青磁I類で内定が露胎、

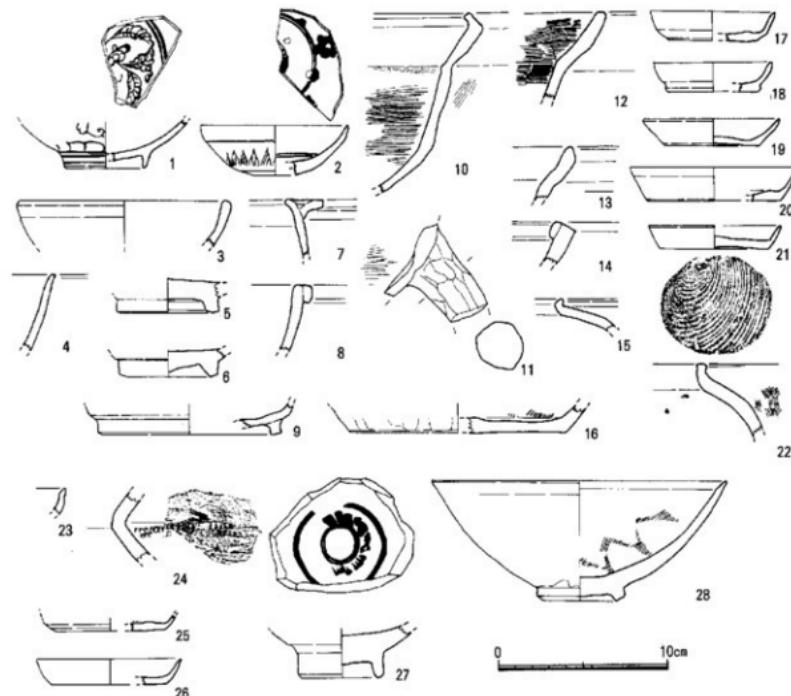


Fig. 5 溝出土遺物実測図 (1/3)

6は白磁壺類の底部である。7、8は陶器で7は小豆色を呈し、8は黄白色の釉を施す。9は須恵器の杯である。10、11は足鍋で10の外面に煤が付着する、12、13は土師質の鉢、14は瓦質で擂鉢と考えられる。15は須恵器で無頭壺である。16は瓦質擂鉢の底部で白色を呈す。17から21は糸切り底の土師皿で、復元口径は順に7.4、7.2、8.1、10.0、7.9cmを測る。22は土師質の壺で2次焼成による赤変がみられる。

溝3 溝1の東側1mにあり、途中で切られる。断面逆台形を呈し、深さ30から60cmを測る。底の標高は南端で7.6m、溝1に切られる部分で7.2mである。覆土は黄茶色土である。

出土遺物 23から26が出土した。23は天目椀の小片、24は須恵器の壺の頸部、25、26は糸切り底の土師皿である。

溝4 溝状の浅いくぼみで粗砂が溜まる。遺物は出土していない。

溝5 断面レンズ状の溝で茶褐色土を覆土とする。南側は表土剥ぎ時の掘りすぎで失っている。深さ30から40cmをはかり、底の深さは南端で標高7.6m、北端で7.0mである。

出土遺物 27は明代の青磁で見込みに花文を彫る。28は同安窯系青磁碗I類で淡い発色である。遺物は少なく他に土師皿等が出土している。

溝500 調査区中央を走る。淡茶色の覆土でSK482等の遺構に切られ、臺階586を切る。土師質土器、土師皿、須恵器片が出土している。

溝532 B3区から2区の調査区外に延びる溝で幅約40cm、深さ9cmを測る。底面の標高は6.98mから7.05mで、どの方向に低いともいえない。遺物は土器小片が出土している。

(2) 堀立柱建物およびピット出土遺物

ピットは調査区全体に広がるが、特に溝5の東側の範囲に集中し、一見して東西方向に並んでいる。ピットの数からして建物が複数回建てられた事は想定できる。2棟の建物と1列の柵状の並びを復元したが、ピットの採りようによつてはいく通りもの建物が復元できる。復元案としておきたい。

SB170 溝5の東岸沿いに南北方向、C7区で直交して東西方向に深さ60cmから130cmの大型で深めのピットが並ぶ。ピットの集中部を囲む様に並び、柵を想定した。

出土遺物 31は土師質の鉢、32は糸切り底の土師皿でピット158、614から出土した。

SB171 2間×4間の建物を復元した。梁行き全長5m、柱間は桁行き全長7.2m、柱穴は円形もしくは楕円形で50から70cmを測る。

出土遺物 29は白磁碗類V類と考えられ、30は糸切り底の土師皿でピット82、168から出土した。

SB172 2間×3間以上の建物で梁行き全長3.8m、桁行き全長6.9m以上を測る。柱穴は円形で径50から70cmを測る。擂鉢、土師皿の小片が出土している。

ピット出土遺物 ピットの数は多いが遺物は少なく、小片が多い。そのなかから図化にたえる物を示した。33から49は溝5の東側のピット群からの出土である。33は明代の白磁皿、34は白磁碗V類、35は雷文を施した青磁碗である。36は陶器の壺で淡緑色の釉がかかる。37は灰色、38淡黄白色の瓦質の鉢、39、40は土師質の鉢である。41から44は糸切り底の土師皿で復元口径8.0、10.9、10.4、10.8cmを測る。

45から62は溝1以西の出土である。45は白磁碗V類で淡緑色を呈す。46は刷毛目の椀、47は染付直B群、48は明代の青磁碗で外面に連弁文を施す。49は須恵質胎土に内面に茶色釉を施し、外面焼成のためか緑色のガラス質が付着する壺の口縁で口径6.6cmを測る。50は土師質で淡茶色、51は瓦質で灰色、52は土師質で淡橙色を呈す鉢である。53、54は瓦質の足鍋で54は外面に煤が付着する。55、56は擂鉢である。57は須恵質、58は土師質の釜で鉢がめぐる。59から62は糸切り底の土師皿で口縁部径8.2、

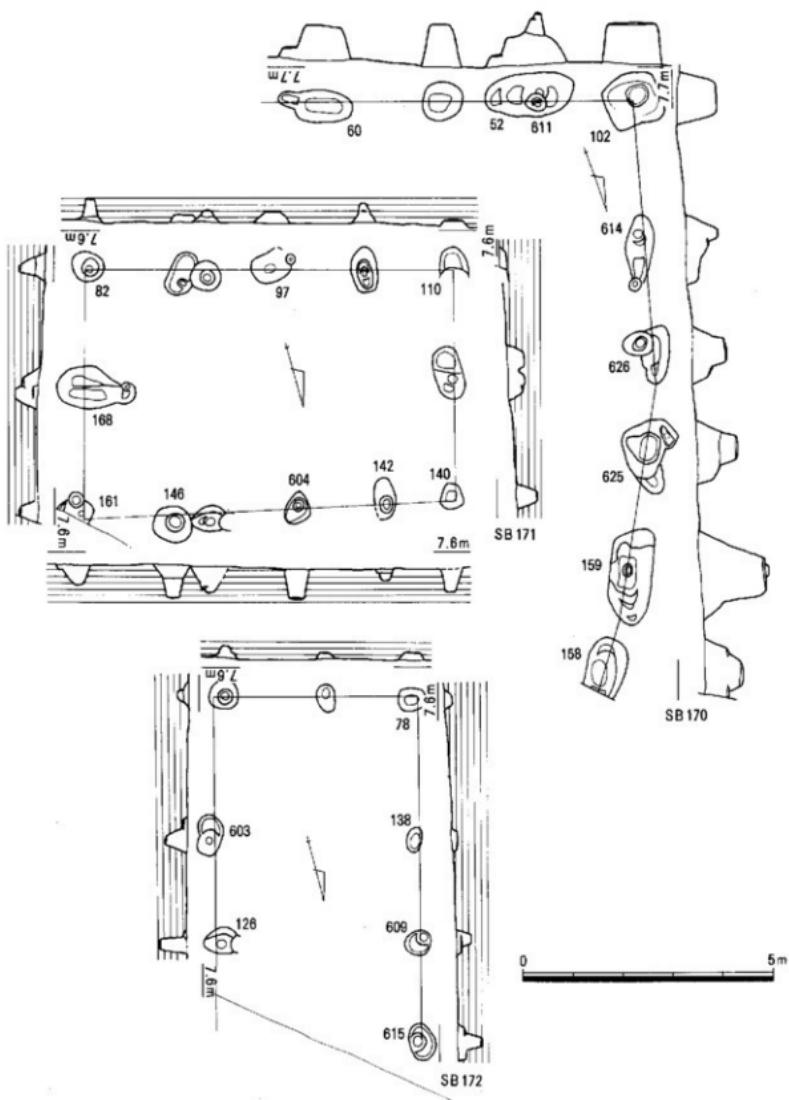


Fig. 6 掘進柱建物実測図 (1/100)

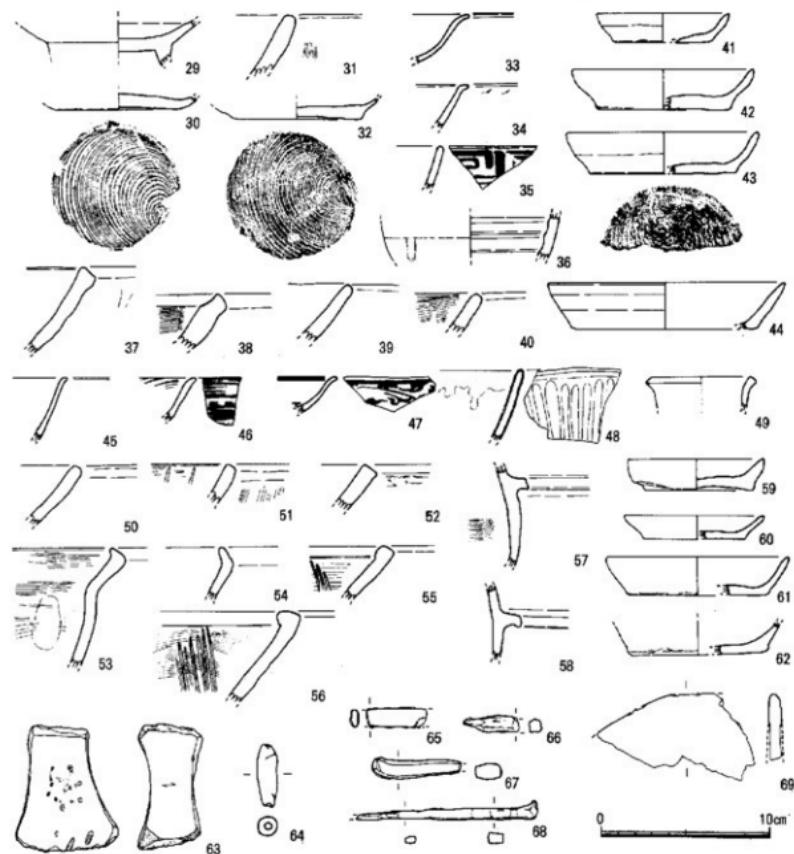


Fig. 7 建物およびピット出土遺物実測図 (1/3)

8.5、11cmを測る。以上土器類を見たが、溝5より東側では足鍋、染付は出土せず、西側より遺物が古い。

63は砂岩製の砥石、64は土錘である。65から69は鉄製品で依存状態が悪い物が多い。65は刀子、66から68は釘状を呈す。69は板状で鍔先等か。63、67、69は溝5より東の出土である。

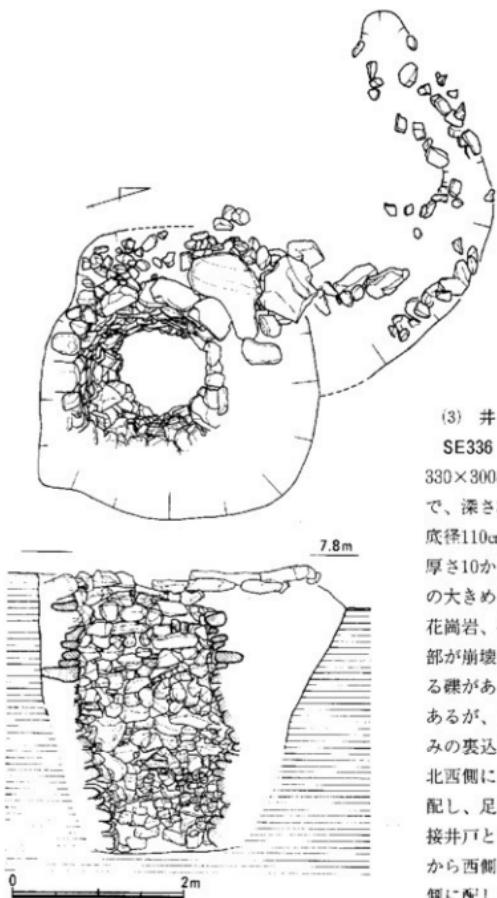


Fig. 8 SE336、SX491実測図 (1/60)

70は染付皿C群、71、72は糸切り底の土師皿で復元口径8.8、11cmを測る。73は須恵器の杯。74から76は瓦質の描鉢、77は瓦質の足鍋、78は鉢焼きの良い土師質の鉢である。79は瓦質描鉢の底部、80は瓦質の釜で外面黒色を呈す。82は瓦質の土器で器壁が薄い。83から86はSX491の出土で83は白磁皿で黄色がかった白色を呈す。84は糸切り底の土師皿で金雲母が多く口径10.8cmを測る。85は土師質の鉢、86は瓦質の描鉢である。

(3) 井 戸

SE336 石組みの井戸でE 7区に位置する。330×300cmのはば円形で南側が直線的な平面形で、深さ330cmの堀方の南よりに、上面径170cm、底径110cmの石組みを築く。石は幅15から40cm、厚さ10から20cmほどの礫で、転場は4、50cm大の大きめの物でそろえる。使用されている石は花崗岩、砂岩等雑多である。北東側1/2は上部が崩壊し、井戸内にその部分のものと思われる礫があった。井戸内は上部は茶褐色砂質土であるが、下部は暗褐色の粘質土が溜まる。石組みの裏込めは茶褐色の砂質土である。石組みの北西側には長さ100cm幅50cmほどの大型の礫を配し、足場等に用いたのであろうか。また、直接井戸と関係あるか不確定であるが、井戸の北から西側に弧を描いて礫が2列に並び、溝の両側に配した様に出土し、SX491とした。排水路等の可能性もある。

出土遺物 SE336から70から82が出土した。

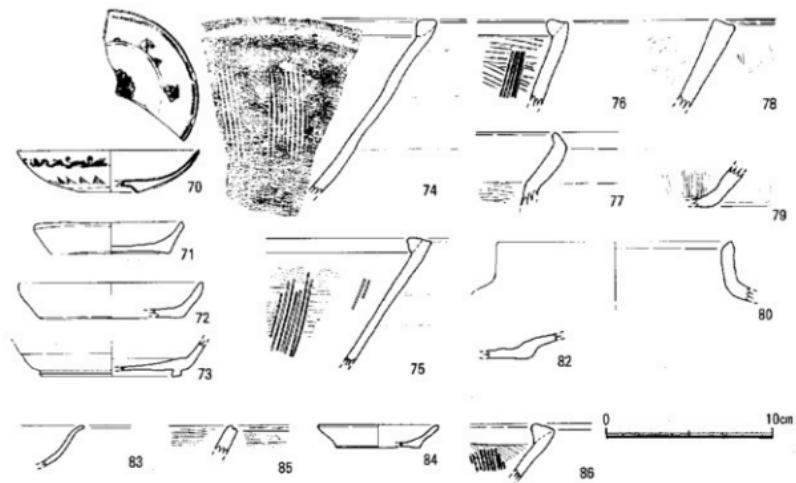


Fig. 9 SE336, SX491出土遺物実測図（1／3）

(4) 土坑

土坑としたやや大きめの遺構は、粗密をもって調査区全体に広がる。その数は200に近く、すべてについてふれることは困難であるため、規模等の概要を表に示した。ここでは分布上のまとまりと特徴的なものについてふれておきたい。遺構図については概要が把握できるよう代表的なものを掲載した。出土遺物については、遺構ごとに主だったものを示した。遺構図とは対応していない。

大小のピットが集中する溝5の東側ではピットと区別しづらい。その中で060、103等は埋土に炭を多く含んでいる。

溝3より西側は大型の遺構が多くそれを土坑とした。遺構の分布から大きく3つに分ける事ができる。つまりE3区のSK454からC5区のSK241、230まで幅50~70cm、長さ2~3mの土坑が東西方向に断続的に連なり、これらの遺構を中心として北側と南側、さらに南側はSE336付近で東西に分けることができる。

北側では黄灰褐色土上面で遺構を検出し、その覆土は淡茶褐色または灰褐色土を埋土とするもののがほとんどである。遺構の分布は若干のまとまりがあるように思われる。E・F・G3・4区では、SK308、309、315、364、337、321、497、409、375、588、326、477他は南北方向に長軸をとり、長楕円形の平面形を呈する点で共通する。また、東西、南北にはば等間隔に並び、総柱建物の柱の配置状である。浅く床が平坦なものが多く柱穴ではないと思われるが、関連する可能性がある。次に西側に散在するSK302、303、305、346は埋土に焼土の固まりが多く入る点で共通する。焼けた面があるわけではなく、埋方も不明瞭で焼土もまとまりがなく図示し難い。以下は特徴がある遺構について若干ふれていく。SK301は円形を呈し深さ30cmほどの中程のレベルに炭が広がる。床より白磁碗の底が出土した。F3区のSK356、435は長方形の堀方で東西方向に長軸をとり類似する。SK435の西側中央には白色の纖維状のまとまりを持ったものが出土したが何から知らない。（図版3(4)）F4区のSK318

は南北方向に長軸をとる長方形の土坑で北西隅から鉄製短刀が出土している。F 3のSK365、F 4の348の検出レベルでは銅鏡がそれぞれ4個と5個固まって出土した。土坑に伴うかはっきりしない。銅鏡については遺物の項で述べる。C 3のSK329からは白磁が割れた状態で散乱して出土し、西端部には炭の広がりが見られた。SK330は西側隅から鉄釘が出土している。D 5付近の201、202、203、205は長楕円形を呈し焼土、炭粒および焼けた粘土塊が多く含む。粘土塊の中には平らな面を持ち、木骨状の痕跡があるものがあり土壠などを連想させる。他の遺構でも小型の粘土塊を含むのもある。

中央部の東西方向の長楕円形の土坑は約18mにわたって断続的に連なる。暗褐色の粘質をおびた土を埋土とし、立ち上がりがはつきりしている。そのうちSK454、333、483、482は焼土を多く含む。SK454は幅40cm深さ60cmを測る。床には炭が溜まり、その上に25cm大と15cm大の礫がある。壁が一部焼け、覆土に焼土が薄く広がる。SK483は壁の特に東西両側が焼け赤色を呈す。覆土は暗褐色土で焼土を多く含む。SK427の北側は6×2.5mの範囲が深さ20~30cmくぼみ、径1mほどの範囲に炭が広がる。覆土がSK427等と同じで関連があると考えられる。

南側は遺構がほとんどない東半と遺構が密集する西半に分かれる。西側のC・D・E 1・2区では炭、焼土の粒を多く含んだ暗褐色土が広がり、その上面で遺構検出を行ったがくぼみ状の遺構を検出したのみで、それを除去した黄褐色土上面ではほとんどの遺構を検出した。灰褐色土、茶褐色土を覆土とし、黄色土ブロックが混じるものもある。遺構は壙方がはっきりし、深いものが多い。隅丸の長方形を呈し、東西もしくは南北方向を意識している様である。密集区の南側のSK588から563に東西方向に大

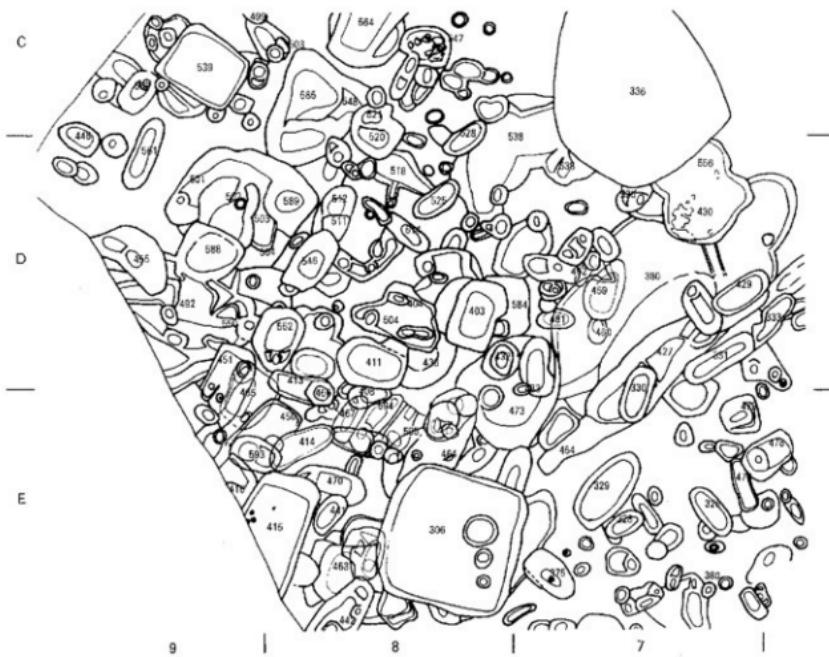


Fig.10 土坑集中地点实测图 (1/100)

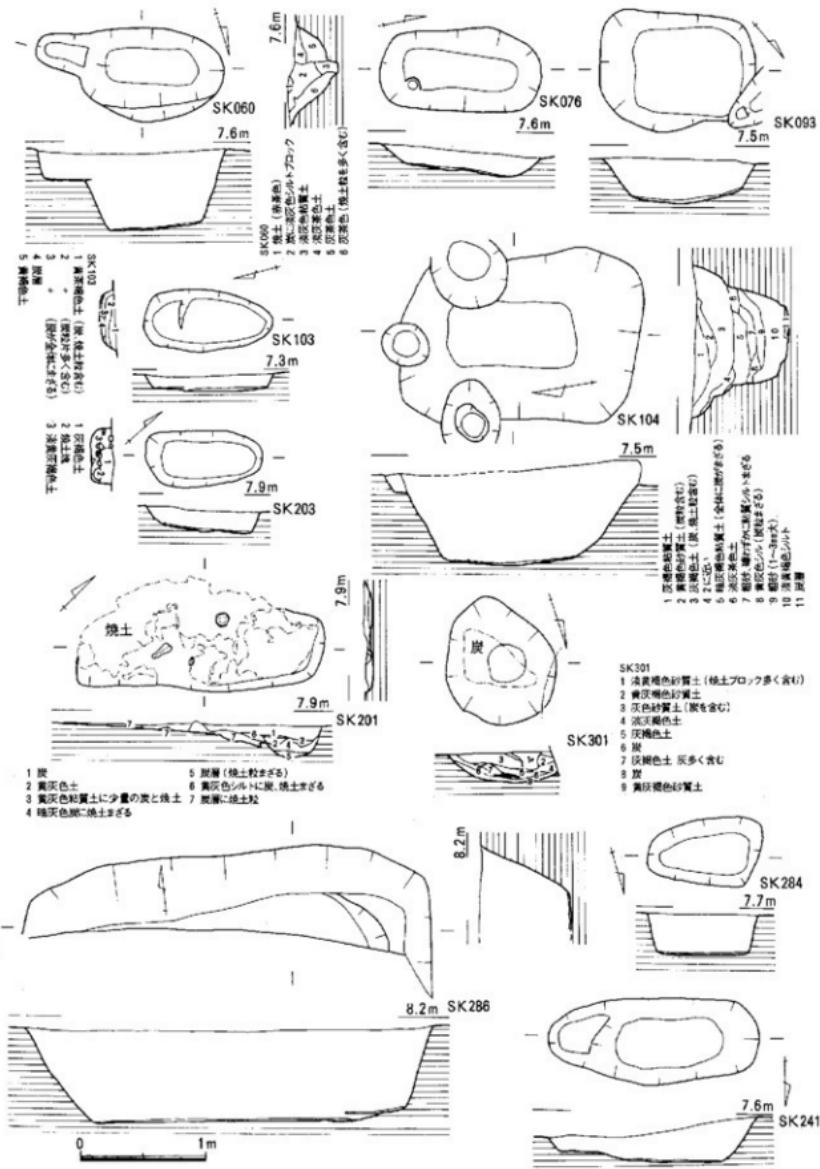


Fig.11 土坑実測図 1 (1 / 40)

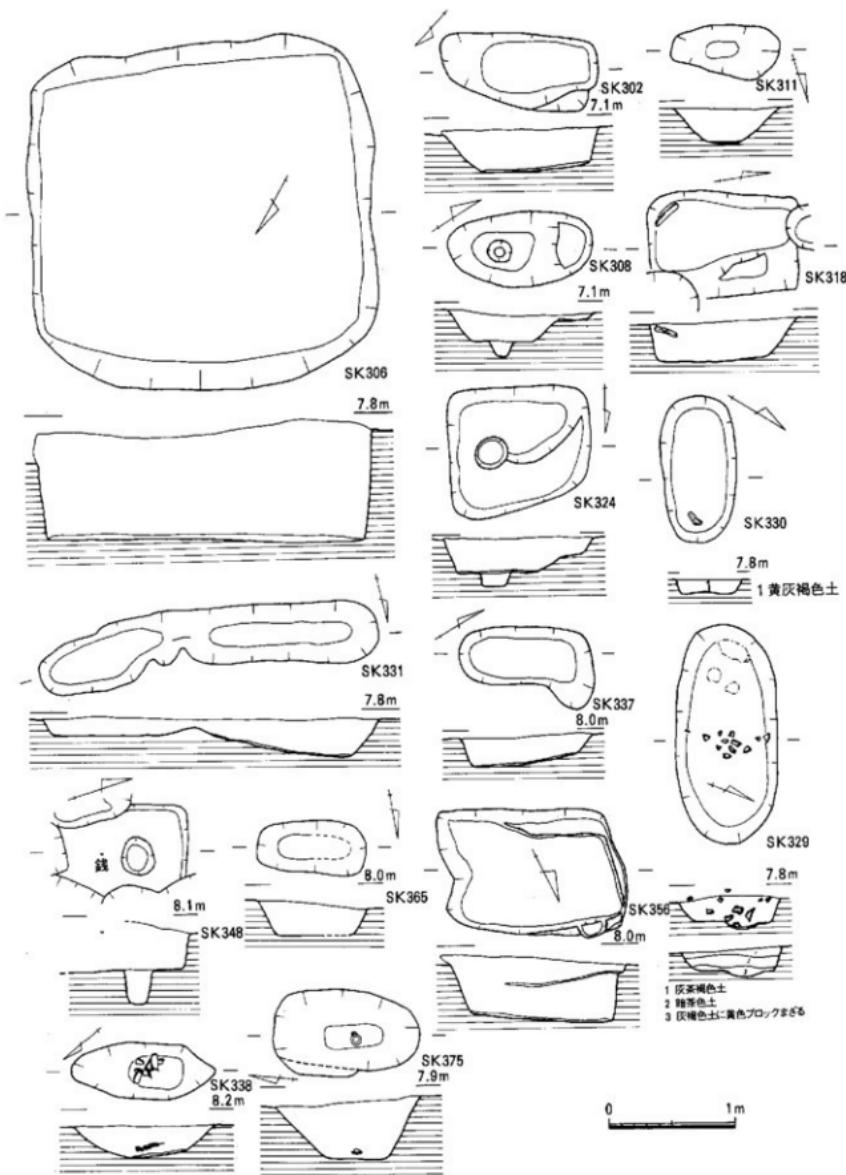


Fig.12 土坑実測図 2 (1 / 40)

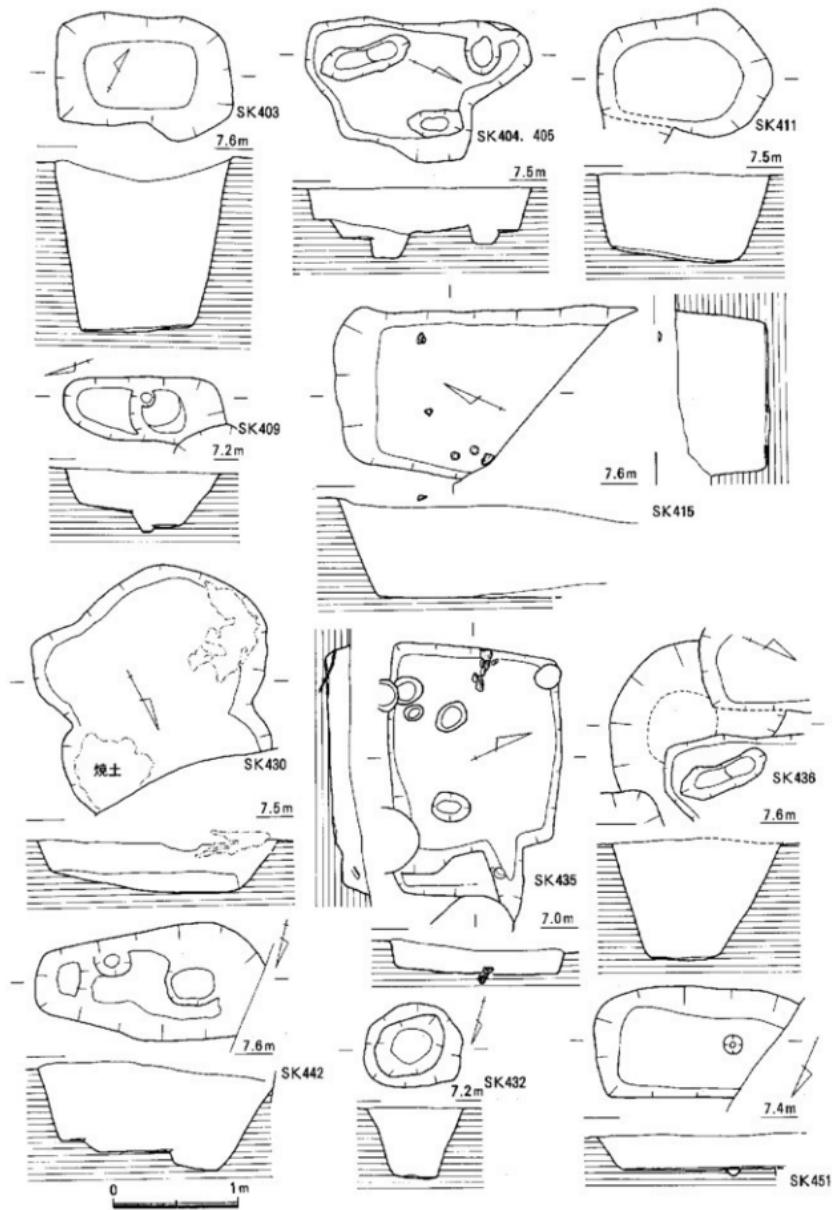


Fig.13 十坑実測図 3 (1/40)

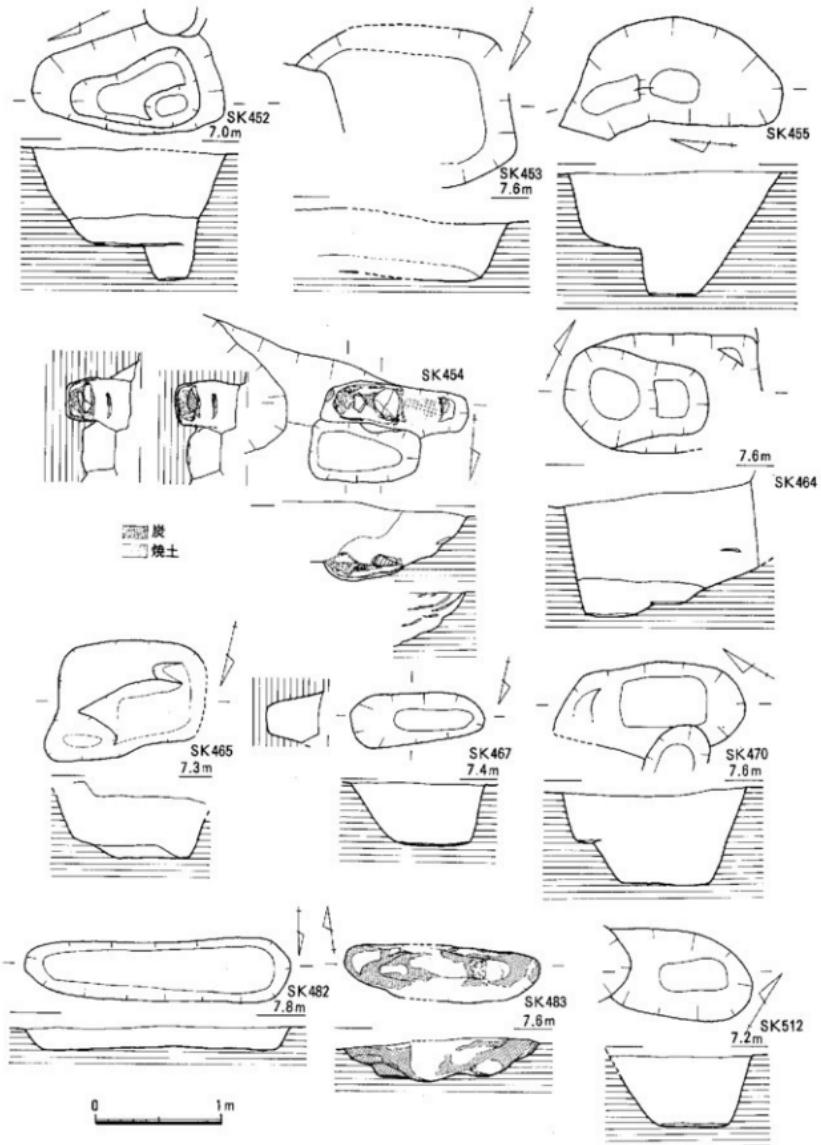


Fig.14 土坑実測図 4 (1/40)

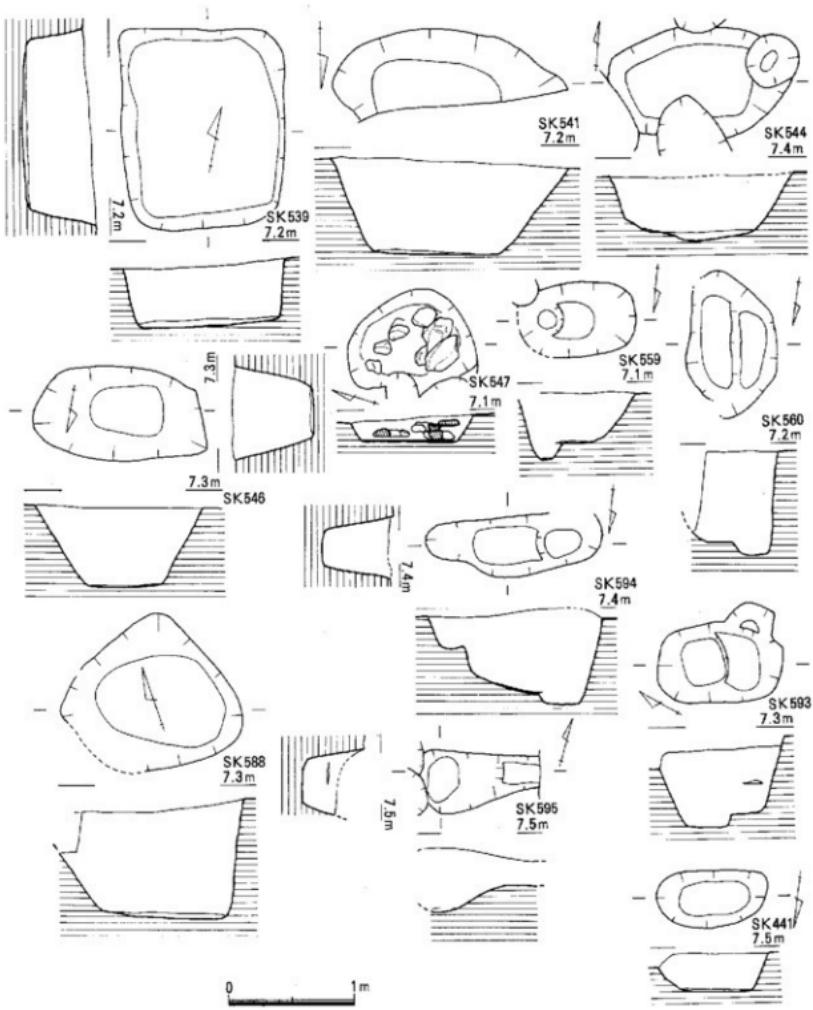


Fig.15 上坑実測図 5 (1 / 40)

型の土坑が並び、これらと中央部の東西長土坑が密集を区切るような位置にある。SK306は一辺3mの大型の土坑で、その上面は黄色土が広がり、その上には炭が広がっていた。SK415の周りには焼土、炭、焼粘土塊が広がる。遺構の中位以下は茶褐色土を覆土とし、床からは土師皿3個が正置した状態で出土した。

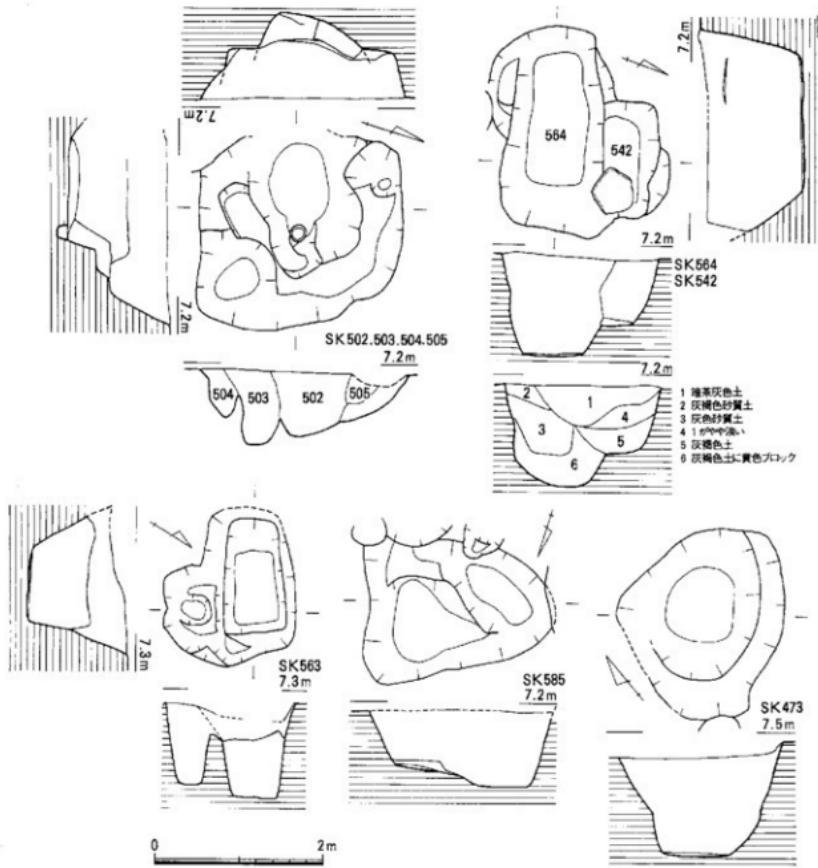


Fig.16 土坑実測図 6 (1/60)

出土遺物

87から90はSK201の出土で87は上師皿で口径11.1cmを測る、88は染付皿c類で骨付きは釉剥ぎを施す。89は粉青沙器、90は火舍で外面黒色。91はSK202出土で土師質の脚と思われる。92は朝鮮時代青磁皿で灰色、93は白磁碗で淡緑灰色を呈す。94は瓦質足鍋の口縁部でSK223の出土。95は糸切り底の土師皿で復元口径8.7cmを測りSK239出土。96は瓦質の擂鉢で淡灰色を呈し、97は土師皿でSK241出土である。98、99はSK281出土で土師質の鉢と鍔連弁文の青磁碗の底部で底径3.7cmである。100は瓦質の鉢でSK234出土。101は弥生中期の高坏の脚で弥生時代の造構と考えられるSK283の出土である。102から106はSK286の出土で102は青磁皿で淡い緑色を呈し底部付近は露胎である。103、104は瓦質の擂鉢、105は瓦質で足鍋の脚、106は鉄製品である。107、108はSK301出土の白磁碗類と瓦質の釜である。109、110はSK303出土で土師皿と足鍋である。111から116はSK304出土で111、112は足鍋、

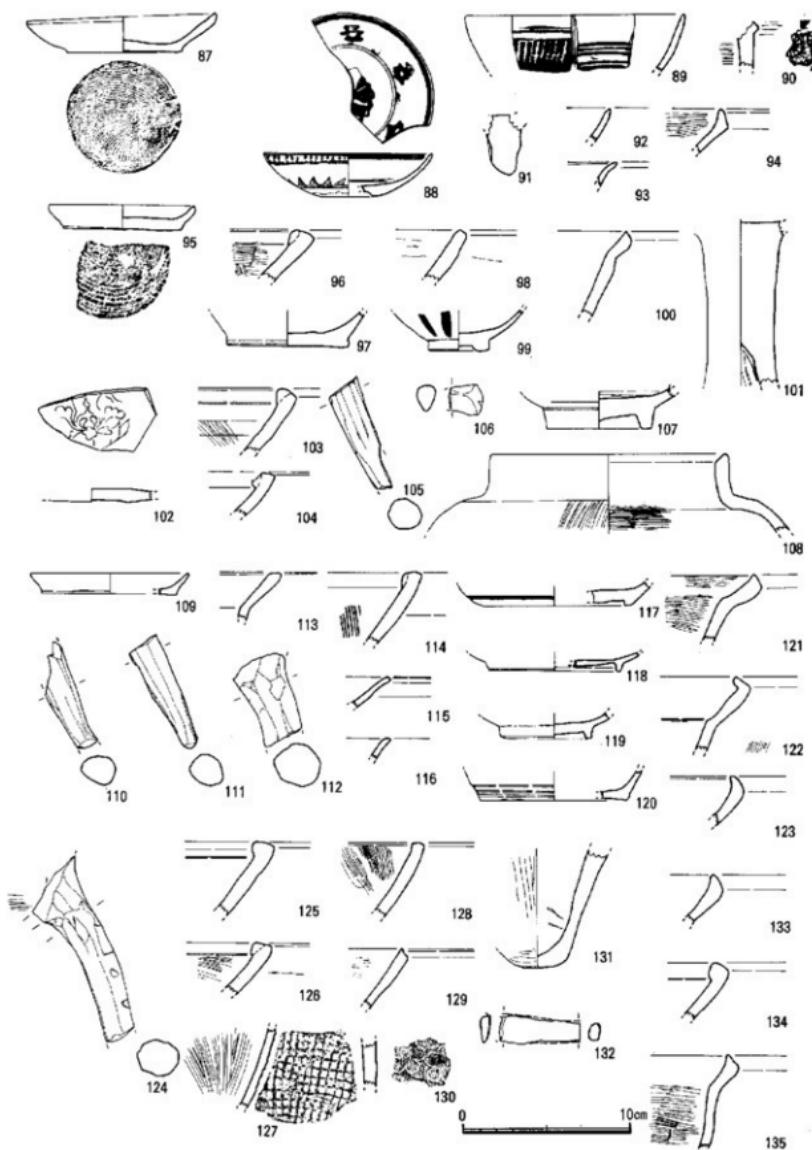


Fig.17 土坑出土遺物実測図 1 (1 / 3)

87~90 : SK251 91 : SK262 92~94 : SK223 95 : SK239 96~97 : SK241 98~99 : SK281 100 : SK234 101 : SK283
102~106 : SK256 107~108 : SK261 109~110 : SK263 111~115 : SK303 111~116 : SK334 117~133 : SK306 133~134 : SK309 135 : SK315

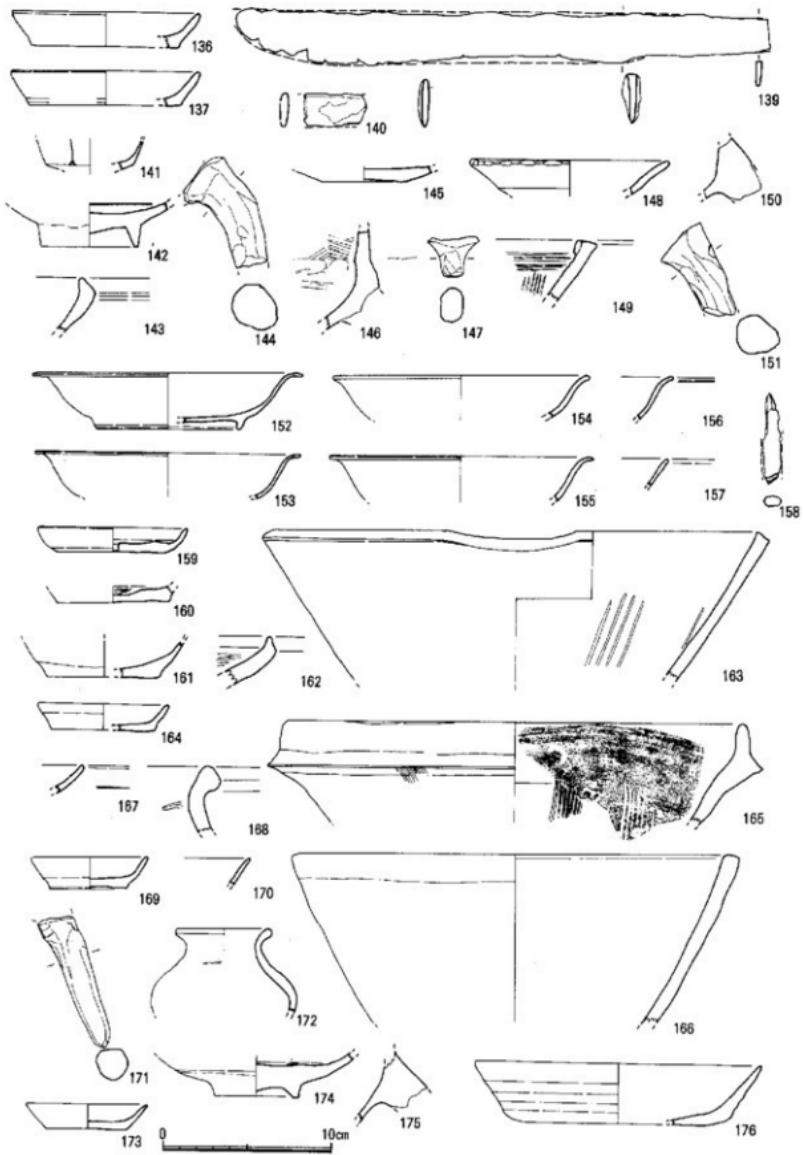


Fig.18 土坑出土遺物実測図 2 (1/3)

| | | | | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 136~140 : SK318 | 141~144 : SK321 | 145~147 : SK323 | 148~149 : SK324 | 150~151 : SK325 | 152~157 : SK299 | 158 : SK326 |
| 159 : SK322 | 160~162 : SK327 | 163 : SK328 | 164~165 : SK345 | 166 : SK347 | 167~168 : SK356 | 169~171 : SK375 |
| 172 : SK398 | 173~175 : SK399 | 176 : SK380 | | | | |

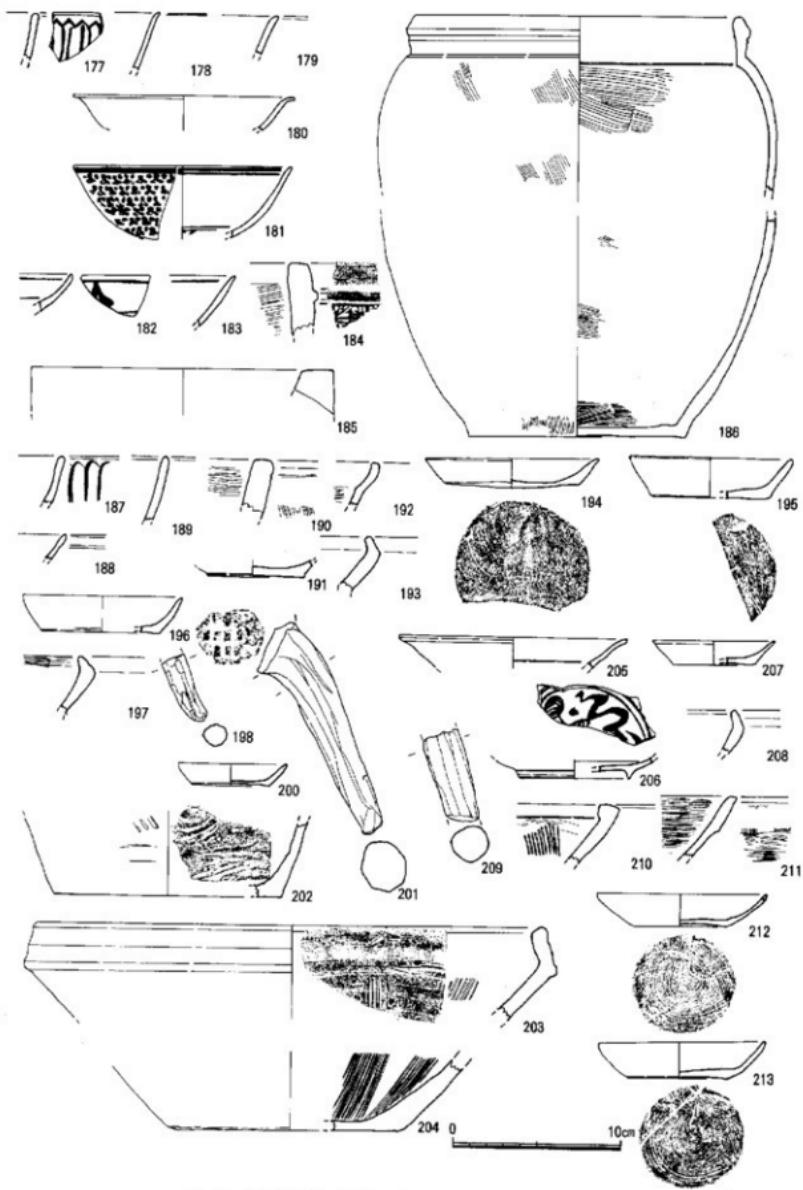


Fig.19 土坑出土遺物実測図 3 (1/3, 1/4) 186のみ 1/4
 177~186 : SK403 187~193 : SK404 194~195 : SK407 196 : SK406 197~200 : SK411
 201 : SK412 202 : SK413 203~204 : SK416 205~211 : SK427 212~213 : SK436

113は瓦質の釜、114は瓦質擂鉢、115は白磁皿、116は白磁碗である。117から132はSK306の出土である。117は青磁皿で内底部は露胎である。118は白磁皿で置付は露胎、119は淡橙色の胎土に淡黄色の釉を施す陶器で、置付きと内定は釉剥ぎで内面の釉は1mm弱大の気泡が密にみられる。120は土師皿、121、122、123は瓦質で足鍋の口縁部、124は脚、127は胴部である。125、126は瓦質の擂鉢、128は瓦質の鉢、129は土師質の土鍋、130は火舍である。131は瓦質で外面に煤が吸着する。大型の香炉等の脚と考えられる。132は鉄器で刀子状である。133は足鍋、134は擂鉢で共に瓦質でSK309出土である。135はSK315出土の足鍋で須恵質である。136から140はSK318出土で136、137は土師皿で復元口径11.2cmを測る。139、140は鉄器で短刀と刀子片と考えられる。141から144はSK321出土で141は白磁で八角杯、142は白磁碗V類、143、144は瓦質で足鍋である。145から147はSK323の出土である。145は淡黄茶色の胎土に青みがかった灰色の釉を施し底部は釉剥ぎである。朝鮮時代の陶器か。146は瓦質の足鍋、147は土師質の脚である。148は口縁部に列点を施す青磁皿でくすんだ淡緑色を呈し、149は瓦質擂鉢でSK324出土である。150、151はSK326出土の足鍋である。152から157はSK329出土の白磁皿で白色を呈す。158はSK330出土の釣。159はSK332出土の土師皿で復元口径9.0cmを測る。160は糸切り底の土師器の底部で煤が付着、161は土師皿、162は白色の瓦質足鍋でSK237出土である。163はSK338出土の瓦質の擂鉢で胎土は細かく淡橙色を呈す。164は土師皿で復元口径7.8cm、165は備前IV期の陶器の擂鉢でSK343出土である。166は土師質の鉢で当戦を呈す。SK347出土。167は白磁皿片、168は土師質の甕でSK356出土である。169は土師皿で口径7.0cm、170は染付椀片、171は瓦質の足鍋でSK375出土である。172は陶器の壺でSK398出土。173は土師皿で復元口径7.2cmを測り、174は青磁碗で青みがかった灰色の釉がかかり見込みに目跡がみられ朝鮮時代のものか。175は足鍋で173、174共にSK399出土である。176は土師皿で復元口径17cmを測る。SK380出土である。177から186はSK403出土。177はB-IV類の青磁碗で細線連弁文を施す。178、179は白磁碗で178は淡緑灰色を呈し、179は白色を呈す。180は白色の白磁皿。181、182、183は染付で椀C群、皿C群、椀C群と考えられ、182は黄灰色にややくすむ。184は瓦質の火舍、185は砂岩製の擂臼、186は瓦質の壺で暗灰色を呈す。187から193はSK404からの出土である。187は明代の青磁碗で片彫りの連弁文を施す。188は緑灰色を呈す朝鮮時代青磁、189は黄緑色の青磁碗、190は土師質鉢で淡黄褐色を呈す。191は糸切底の土師皿、192は土師質の鉢、193は足鍋である。194、195はSK407出土の土師皿で金雲母を多く含み明茶色を呈し復元口径10.5、9.9cmを測る。196はSK408出土の土師皿で復元口径9.5cmを測る。197、198は瓦質の足鍋である。200は復元口径6.5cmの土師皿でSK411出土。201はSK412の足鍋である。202はSK413出土の須恵器の底部である。203は備前V期の擂鉢の口縁部、204は同じく底部でSK416出土である。203はSK551のものと接合した。212、213はSK430の土師皿で口径10.2、10.1cmを測る。214から234はSK415出土である。214から216は白磁皿で白色からやや灰色がかった釉を施す。217は明代の青磁の底部で見込みに寿の文字を書く。218、219は染付でB群の皿とB群の碗である、220は灰色の瓦質の擂鉢、221は足鍋、222は灰色の瓦質の鉢である。223から231は土師皿で224と227は細かな胎土で淡赤茶色を呈す。口径は順に7.5、6.2、6.5、6.5、6.1、9.7、9.2、10.0cmを測る。232は土師質の鉢で外面に煤が多い量に付き錆状の取手に孔を2箇所あける。233、234は鉄器で断面方形である。235、236はSK433出土瓦質の擂鉢と足鍋である。237は瓦質の釜の口縁部、238は口径10.0cmの土師皿でSK435出土。239は瓦質の擂鉢、240は土師質の鉢、241は復元口径7.4cmの土師皿でSK437出土である。242はSK441の瓦質足鍋で煤が多く付く。243はSK449の土師皿で復元口径7.9cmを測る。244は染付皿B群、245は土師質の脚でSK451出土。246は土師質の擂鉢でSK452出土。247は朝鮮時代青磁で高台、見込みに目跡が付き全面施釉、248は瓦質の足鍋、249は揭露陶器の壺、250は備前の擂鉢でSK454出土である。251は陶器で淡茶色の胎土で白色釉を施す。252は朝鮮時代青磁で青みがかった灰色を呈し、253、254は

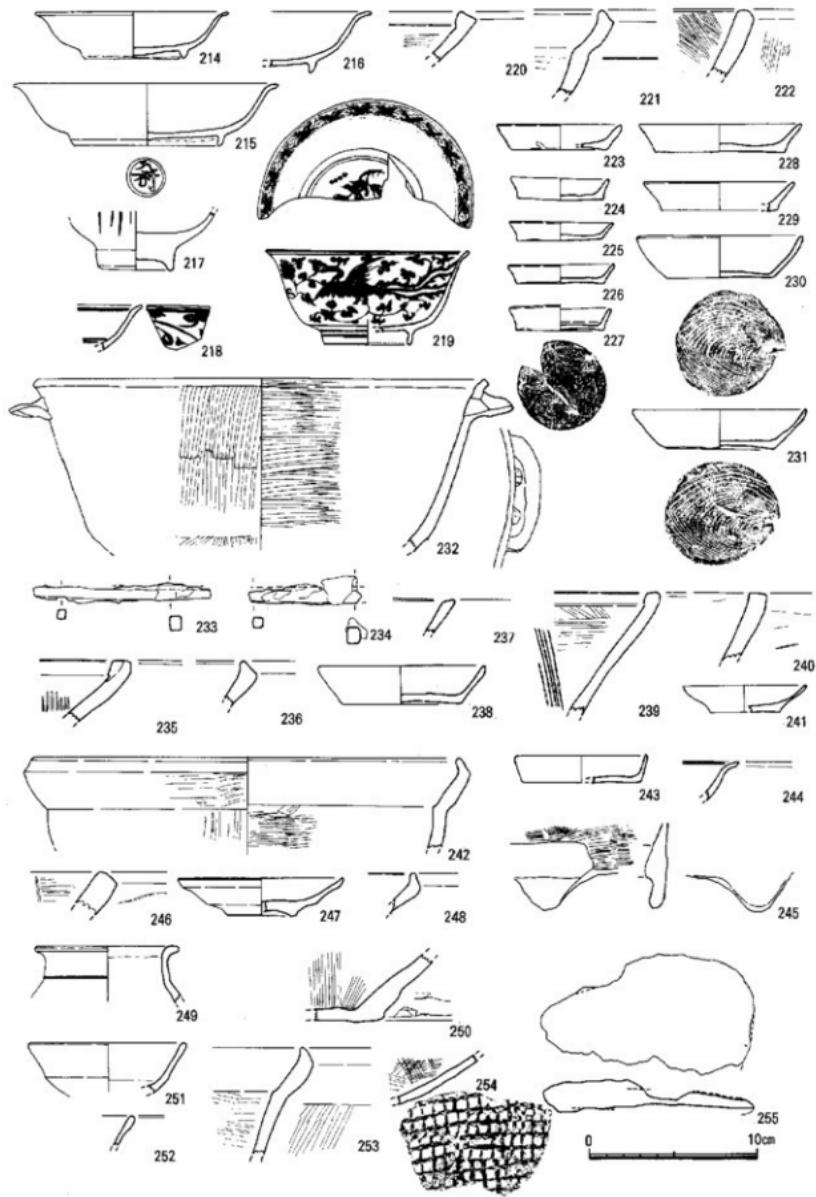


Fig.20 土坑出土遺物実測図4 (1/3)

214~234 : SK415 235~236 : SK435 237~238 : SK436 239~241 : SK437 242 : SK441 243 : SK449
244~245 : SK431 246 : SK452 247~250 : SK454 251~253 : SK455

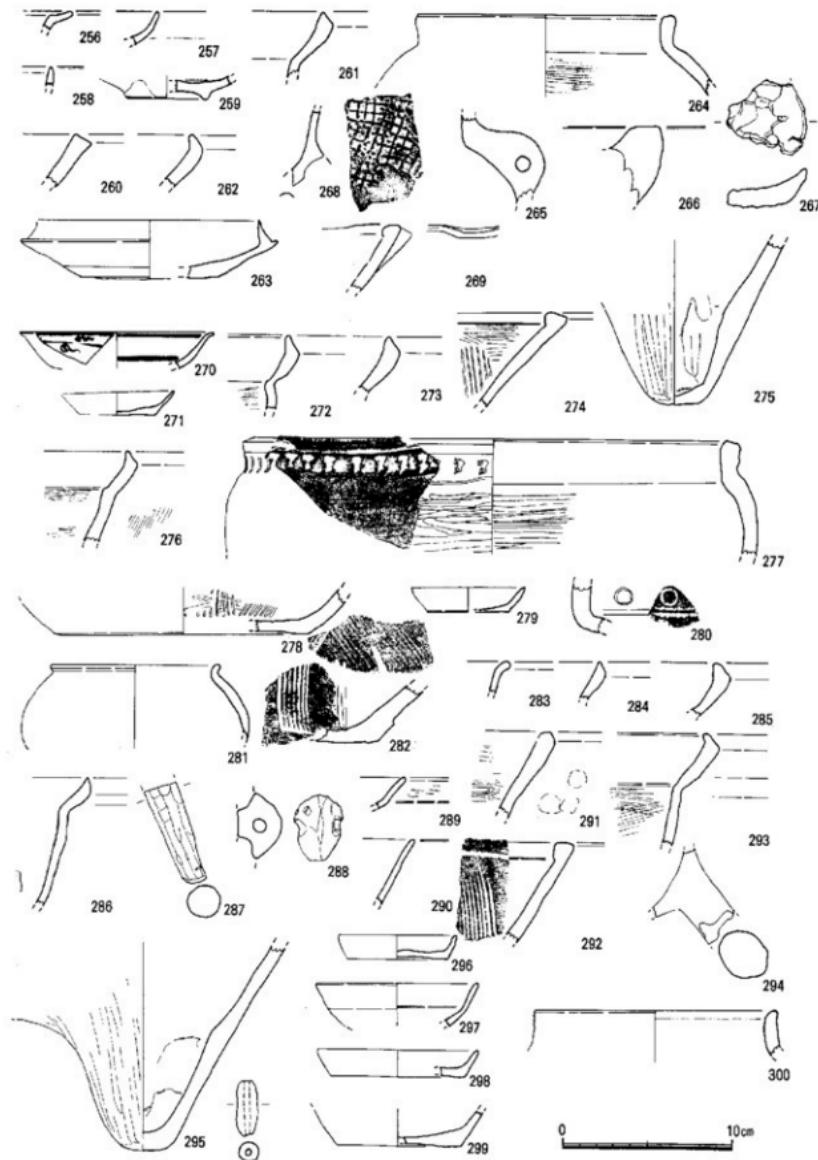


Fig.21 土坑出土遺物実測図 5 (1/3)

256~267 : SK456 268~269 : SK459 270~275 : SK462 276~279 : SK463 279~280 : SK464 281~282 : SK466 283~285 : SK468
286~288 : SK467 289~295 : SK472 296 : SK473 297 : SK478 298~299 : SK479 300 : SK481

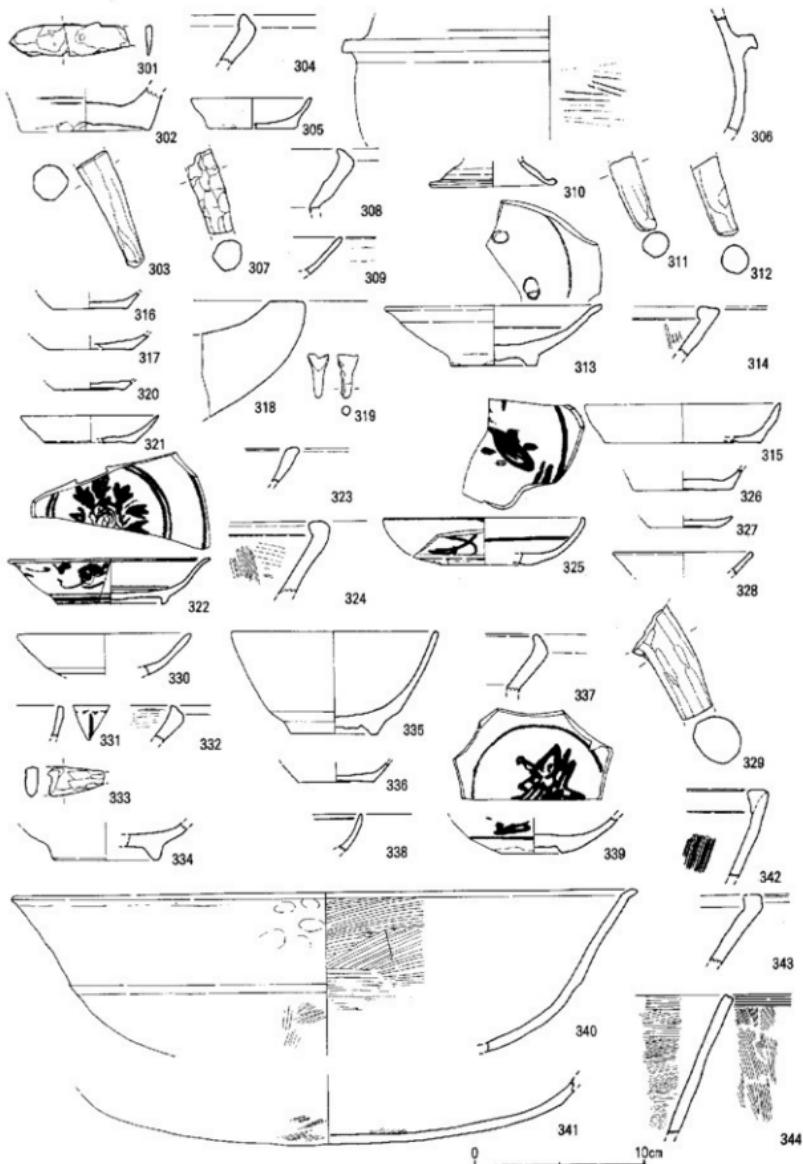


Fig.22 土坑出土遺物実測図 6 (1/3、1/4) 340・341のみ 1/4

| | | | | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|------------------|-----------------|
| 301 : SK5601 | 202~302 : SK502 | 304~307 : SK508 | 309~309 : SK505 | 310~311 : SK511 | 312 : SK520 | 313 : SK521 |
| 314~315 : SK554 | 316~319 : SK538 | 320~321 : SK539 | 322~323 : SK541 | 324~325 : SK542 | 326~327 : SK5247 | 328~329 : SK548 |
| 330~332 : SK550 | 333 : SK593 | 334 : SK598 | 335~336 : SK559 | 337 : SK563 | 338~344 : SK564 | |

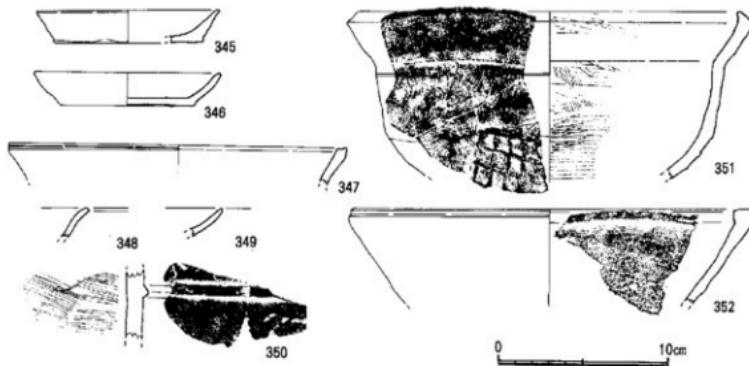


Fig.23 土坑出土遺物実測図 7 (1 / 3)
345~346 : SK577 347 : SK584 348~350 : SK588 351~352 : SK578

足鍋でSK455出土である。255はSK455出土の鉄製品で鍔等と考えられる。256から267はSK456出土である。256は龍泉窯系青磁小椀Ⅲ類、257は白磁皿、258は茶色の釉を施す椀で口縁部の釉を剥ぐ。259は青磁で緑色の釉を施し、見込み、高台内底部は露胎である。260は白色の瓦質鉢、261、262は足鍋で外面に煤が付き、263はⅢBの須恵器の杯である。264、265は瓦質の釜、266は砂岩製の石臼、267は鉄器である。268、269はSK459出土上の瓦質の足鍋と鉢である。270から275はSK462の出土で270は染付皿B群、271は土師皿で口径6.8cmを測る、272、273は瓦質の足鍋、274は瓦質擂鉢、275は瓦質の脚で黒色を呈す。276は瓦質の足鍋、277は瓦質の風炉、278は瓦質の擂鉢でSK463の出土である。279は土師皿復元口径6.8cm、280は瓦質の火鉢でSK464出土。281は須恵質の鉢、282は陶器の擂鉢でSK466出土である。283は青磁椀、284、285は瓦質の足鍋でSK465出土である。286、287は足鍋、288は瓦質の取手でSK467出土である。289から295はSK472出土で289は淡茶色の胎土に淡茶色の釉を施す陶器椀、290はくすんだ緑色釉の青磁椀である。291は瓦質の鉢、292は瓦質擂鉢、293、294は瓦質の足鍋、295は瓦質の脚部である。296はSK473出土の上師皿で口径6.9cmを測る。297は朝鮮時代青磁でSK478の出土である。298、299はSK479の上師皿で298の復元口径9.6cmを測る。300は瓦質の釜でSK484出土である。301はSK501出土の鉄器で刀子状を呈す。302は陶器の壺の底部で褐色を呈し、303は足鍋でSK502出土。304、307は足鍋、305は復元口径7.5cmの土師皿、306は鍔付きの瓦質の釜でSK503出土である。308は瓦質の足鍋、309は朝鮮時代青磁皿でSK505出土である。310は灰釉の陶器の脚、311は瓦質の足鍋でSK511出土。313はSK521出土の見込みに目跡がある白磁でわずかに青みがかった白色釉を施す。314は瓦質の擂鉢、315は土師皿で復元口径11.8cmでSK534出土。316から319はSK538出土である。316、317は土師皿、318は砂岩製の擂鉢、319は鉄製品である。320、321はSK539出土の土師皿で321の復元口径8.2cmを測る。322は染付皿B群、323は瓦質土器でSK541の出土である。324は瓦質擂鉢、325は染付皿C群でくすんで黄色がかる。SK542出土。326、327はSK547出土の土師皿である。328は白磁皿、329は足鍋でSK548出土。330は胎土が灰色の陶器で灰色釉の青磁である。331は縦線連弁文の青磁片、332は瓦質土器でSK550出土。333はSK553出土の鉄器。334は明代の青磁碗で外底部釉剥ぎで釉が厚い。SK558出土。335は朝鮮時代青磁碗で疊付のみ露胎で目跡がある。淡緑色を呈す。336は土師皿でSK559出土。337はSK563出土の瓦質の足鍋。338から344はSK564出土である。338は染付皿、339は染付皿C群でくすんだ青白色を呈す。340、341は土師質の鉢で煤が多く付着

し同一個体の可能性がある。342は瓦質擂鉢、343は瓦質鉢、344は土師質の鉢である。345、346はSK577出土の土師皿で復元口徑11.0cmを測る。347はSK584出土の瓦質土器。348は白磁、349は白磁皿、350は瓦質の火鉢でSK585出土。351は白色の瓦質足鍋、352は瓦質の擂鉢でSK578出土である。

(5) 土師皿埋納遺構

C1、2区で土師皿を集中埋納した遺構が2つ出土した。近接するがそれぞれ土器相が異なる。SX499 42×30cmの範囲に土師皿21+αが重なって出土し、その内の一つ354に銅錢6枚が重ねて置かれていた。土師皿は完形の状態で置かれ、正置したものと逆さに置いたものがある。土師皿には2種類がある。353から369は砂粒をほとんど含まない精良な胎土で明橙色を呈す。糸切り底で切り離しの後、鋭利な工具で削るものが多い。この削りには、全面を平坦に1方向に削るもの(図版8.360)、内側に糸切り痕を残し周りを放射状に削るもの(図版8.363)があり、削りを施さないものもある(図版8.354)。糸切り痕も繊細な波状の痕跡が残るなどや異質である。立ち上がりは下部の器壁が厚手で丸みを帯び、口縁端は尖り気味。内底まで回転で調整で中心に小さな突起が残る物もある。口徑は9.1cmから9.8cmで平均9.4cm、器高は1.6cmから2.5cmで平均2.1cm、底部径は6.6cmから7.6cmで平均7.1cmを測る。370から373は369までは明らかに異なる。黄灰色を呈し細砂粒を非常に多く含み、金雲母が目立つ。糸切り底で内面は同心円状に明瞭に残る。若干上げ底氣味で立ち上がりは急で器壁は薄い。口徑は9.0cmから9.6cmで平均9.3cm、器高は2.0cmから2.4cmで平均2.2cm、底部径は6.8cmから7.2cmで平均7.0cmを測る。出土状況からは埋納時に土師皿の2者が意識された様子はない。両者とも今回の調査区内で出土した土師皿と異なり、叢入品の可能性がある。

374から380は重なって出土した銅錢で374以外は面文はなく径2.2cmと小振りで薄い。私銭と考えられる。374は鋸のため面文がはっきりしないが、明道元宝または正元通宝と考えられる。

SX503 SX499の南東1mに位置する。ピットに切られ残りが悪いが土師皿7個体以上が出土した。遺存状況で南北2つに分かれ、北側は4枚以上重なる。その最下のものが逆さであった他は正置された状態である。銭はなかったが攪乱された可能性もある。土師皿の下には炭が薄く広がる。

土師皿は依存状況が悪く、固化に耐えるものが少ない。381から386は灰褐色を呈し細砂粒を多く含むがSX463の370等ほどではない。糸切り底で内底も回転ナデである。器壁は特に中位で薄く、口縁部直下でやや厚くなる。381、382は大きめで器高が高く、383から386はやや小振りである。口徑は381から順に11.0、12.3、7.6、8.3、8.3cmを測る。387はさらに小振りで、くすんだ橙色を呈し他と異なる。このほか足鍋388擂鉢389、青磁片が出土している。

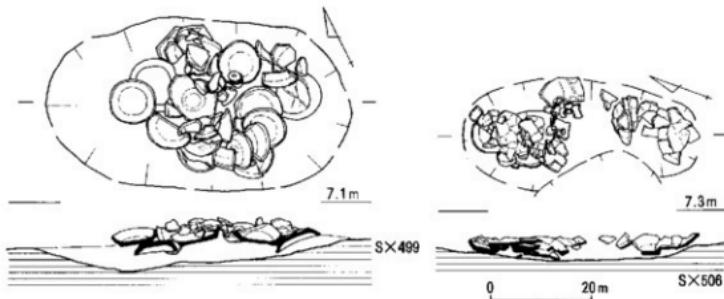


Fig.24 SX499、503実測図 (1/10)

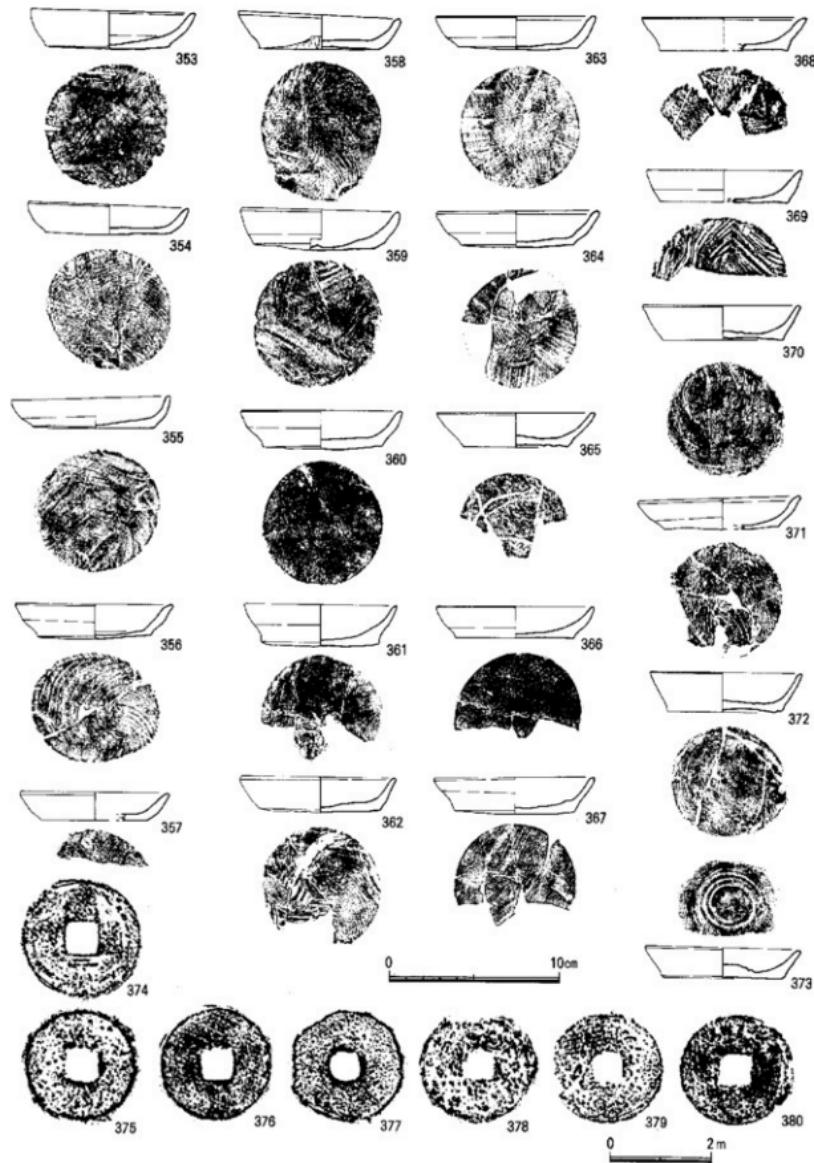


Fig.25 SX499出土遺物實測圖 (1/3, 1/1)

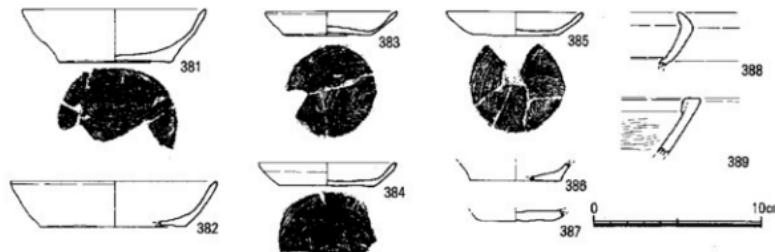


Fig.26 SX503実測図（1／3）

(6) 壺 棚

B 4 区で溝500の底に頭を出していた土器を掘り出したところ、大型の壺が横たわった状態で出土した。削平により半裁されている。掘方は確認できなかった。主軸はN-168°-Wである。出土した壺390は器高75cmを測る。頸部で屈曲して口縁部へ直線的に広がり、口縁部径49.2cmが復元できる。肩部はひずみが大きく最大径57cm~62cmと考えられ、上部が内湾するがその度合いは緩やかな部分もある。図は反転しており、実際はゆがんでいる。底部は厚さ1cm弱と薄く、径12cmほどで立ち上がりがはつきりしない。胎土は砂粒を多く含み、黄灰色から灰褐色を呈す。器面調整は継方向のナデである。類例が見あたらないが弥生後期の壺棺に近いと考えている。

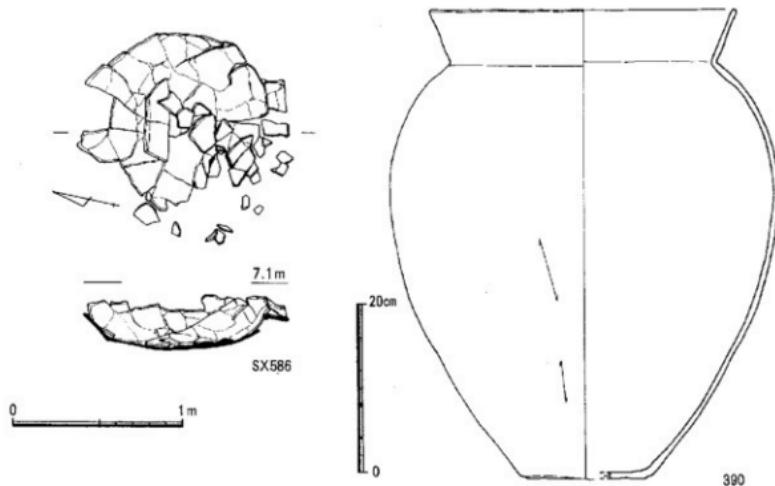


Fig.27 SX586、出土遺物実測図（1／30、1／8）

(7) その他の遺物

以下示すのは、遺構検出時、包含層出土の遺物および後世の遺構に混じった弥生土器等である。

391は蓮弁文の龍泉窯系青磁碗I類、392は青磁碗の底部である。393は白磁の八角杯で白色を呈す。394は白磁碗で青みを帯びた灰白色を呈す。395は赤みおよび青色を帯びた灰色の釉を施し縁付きは釉剥ぎ。胎土は淡黄褐色で若干の砂粒が入る陶器である。396は象眼を施した朝鮮時代青磁で深い緑色を呈し縁付と内底に砂目が多量に付く。397は朝鮮時代青磁で見込みと縁付に目跡がある。398は青磁で見込み、縁付きに目跡が残り淡緑色の釉を全面に施す。399は青磁皿で口縁端部に列点を刻み深い緑色を呈し風化が激しい。400は陶器の取手で緑色の釉を施し三彩の可能性もある。401は刷毛目皿である。402から407は明代の染付である。402は皿B群、403は碗、404は碗B群、405はC群の碗である。404は外面が白色で白磁的である。408、409は染付であるが、器面は青みががり文様が暗灰色で他と異なる。410から413は土師質の土鍋で外面に煤が付着する。414、415は瓦質の足鍋、416から421は瓦質の擂鉢で422から425はその底部である。426は備前IV期の擂鉢、427は瓦質の釜で黒色を呈す。428は瓦質の風炉で白色を呈す。429は瓦質の釜で鈎がめぐる。内面の刷毛目状の調整は深い。430から432は鉄器である。433は環状をなす。433、434は銅製品である。435は嬉石製の管玉でSK306上面付近の出土である。436は滑石製の硯で成形痕が顕著に残るが陸、海部は使用により滑らかである。437は天草石の砥石438から441は石臼である。442から446はSK348の上、447から450はSK365の上からの出土で、遺構に伴うか不明なためここで扱った。451、452はSK502出土、453はSK473出土、454はSK336の東からの出土、455はF2区出土である。すべて調査区の西側半分からの出土である。SK348、365出土のものは土坑との関係ははっきりしないが、まとまっている。

457は古墳時代の甕で茶褐色を呈す。458は須恵器の高台付き杯、459から461は弥生中期の甕の底部、462から466は同じく甕、467は煮である。器面が粗れるが464と466には赤色顔料がわずかに残る。468は幅広の突帯に指による浅い刻目を施す阿高系の上器である。茶褐色を呈す。縄文土器は他に滑石を多く含む厚さ1cmの胴部片が出土している。469、470、471は安山岩製の石器で調整剥離が見られスクレーバーと考えられる。

472はナイフ型石器である。縦長剥片を素材とし、打面を上位に両側にプランティングを施している。石材は暗灰色黒曜石であり、表面の風化が強い。松浦地域に同様の石材を見ることがあるが、産出地は不明である。素材剥片は端正な縦長剥片であり、背面に一方向の3面の剥離がある。先端部は頂部方向からの不整な剥離があり潰れている。現状で長さ4.3cm、幅1.6cm、厚さ0.7cmを測る。所属時期は石器の諸特徴から後期旧石器時代前半期に位置付けられる。473は右核母岩（コアプランク）より剥離された打面調整に伴う削片、いわゆる「スキースポール」である。石材は漆黒色黒曜石で不整円錐状の自然面があり、肉眼観察では牟田産出の可能性がある。背面には後上からの母核の調整剥離があり、右端は未調整で自然面が残されている。幅の広い左側を打面として最初の削片（ファーストスボル）の剥離が行われている。この剥離は失敗し、剥離面が傾斜した階段状剥離を発生している。第二打として同一方向から本剥片が剥離され解放剥離となっている。なお、本剥片の一側面には二次的な微細剥離がみられ、削器としての利用があったと考えられる。長さ5.6cm、幅1.7cm、厚さ1.1cmを測る。この資料は調整が粗雑であるが比較的大きな母核を形成し、作業面からの削片剥離を行う点からみて、九州における楔形石核の典型でもある「擂片型」細石刃核作成に伴う削片と考えられる。したがって、所属時期は縄文時代草創期である。

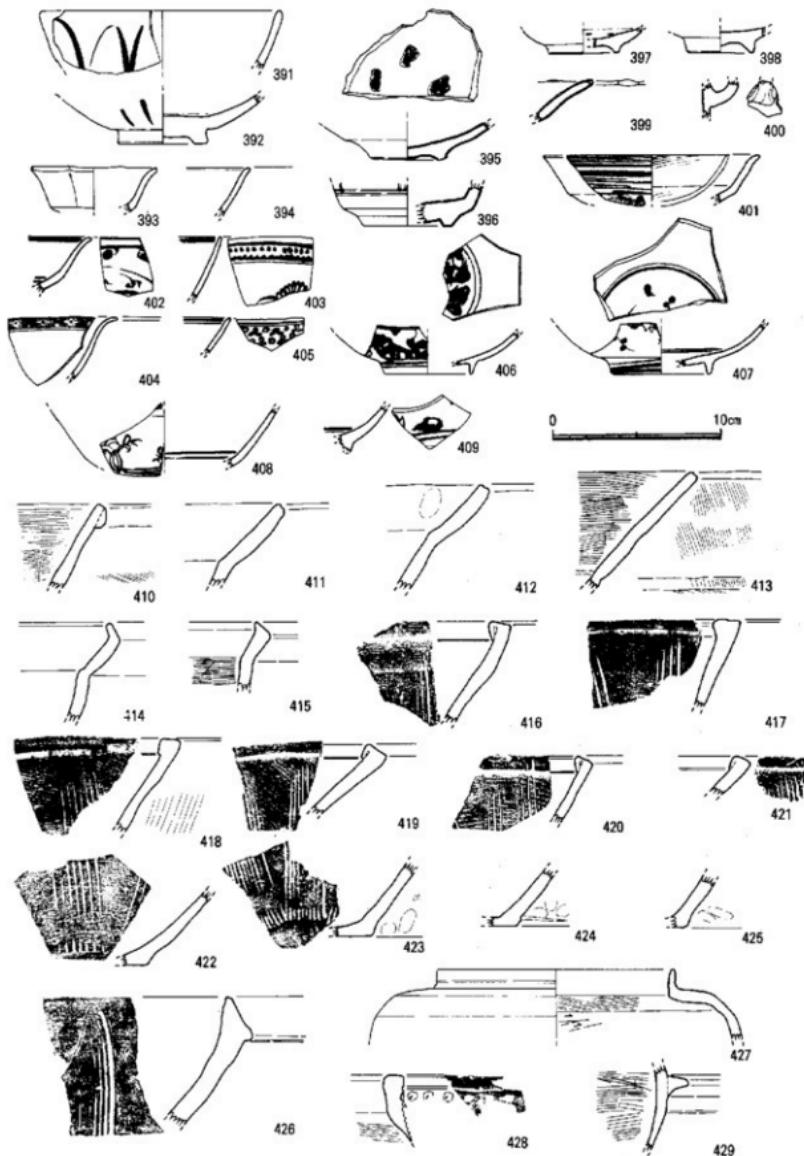


Fig. 28 出土遺物実測図 1 (1/3)

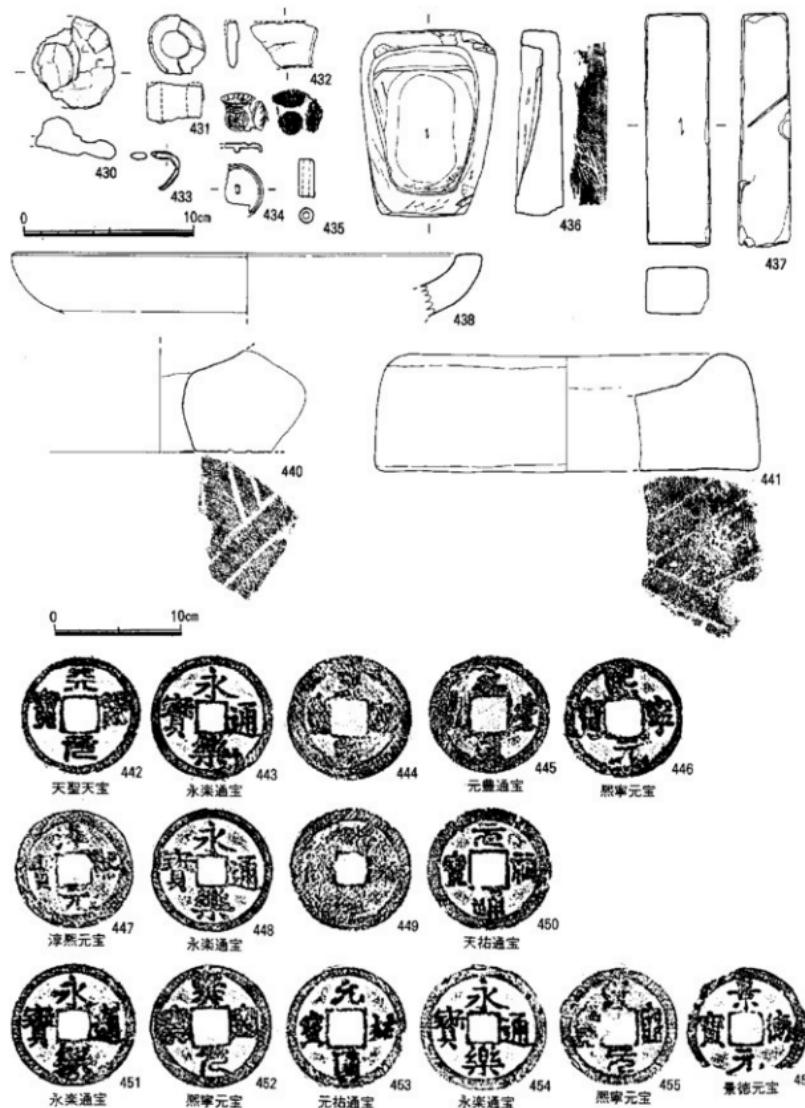


Fig.29 出土遺物實測圖 2 (1/3、1/4、1/1)

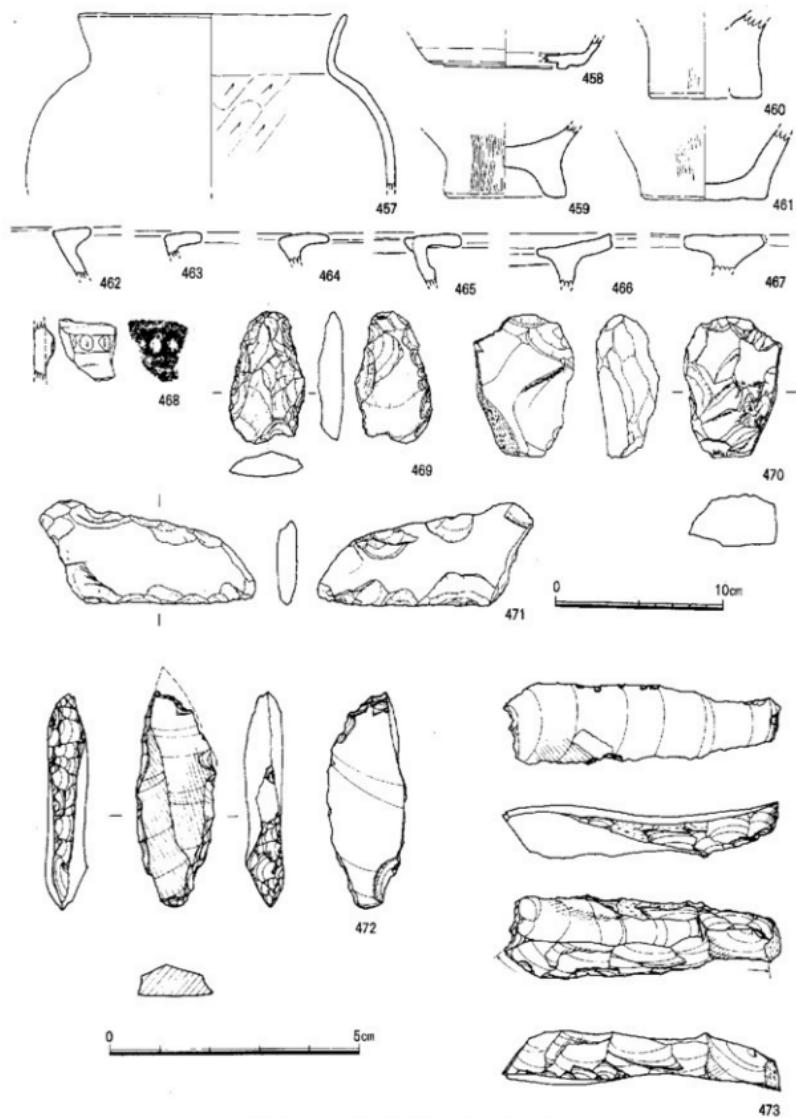


Fig.30 出土遺物実測図3 (1/3, 1/1)

3. 小 結

旧石器時代、縄文時代草創期は石器1点ずつではあるが、新たな遺跡の分布を加えることができた。柏原、大原D、元岡遺跡において草創期から早期の遺跡が丘陵斜面の段丘直下で確認され、立地上の特徴から崖下遺跡と仮称されている。(吉留2000) 本調査地点もこれに近い立地であり、周辺に当該期の遺跡が存在する可能性があるとともに、同様の地形では遺跡の存在を想定する必要がある。

以降の縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代については少量の遺物を検出したのみであるが断続的な活動の場となっていたことが窺える。また、遺構、包含層中から鍛冶滓を中心とした鉄滓が出土しており古代のものと考えられる。出土遺構の分布は調査区の西側にあり調査区外もしくは削平された鍛冶炉の存在が考えられる。

検出した遺構、遺物のはほとんどが中世のものである。時期は大きく12世紀代と15、16世紀の2時期に分けることができる。12世紀代は、龍泉窯系青磁I類、白磁IV類等が出土するが量は少なく、この時期の遺構としてはSK301にその可能性がある程度である。ほとんどの遺構は15、16世紀のもので、その多くから足鍋IV類、擂鉢III類、染付皿B・C群、白磁皿C群等が出土しており、從来の編年観から15世紀終わりから16世紀前半の時期におさまると考えられる。ただし、溝5の東のピット群からは遺物が少ないこともあるが、陶磁器類は白磁皿C群33、ラマ式文様の青磁碗35が出土しているくらいで、以西の多くの遺構から出土した足鍋、瓦質擂鉢が全くみられず、やや占くなるものと考えられる。以上から遺構の形成をたどれば、15世紀段階で溝5が機能し、その東で建物が繰り返し建て替えられる。西側にも遺構は広がると考えられるが特定できない。次に足鍋等が入る段階では先の建物はそのまま機能し、西側に多くの遺構が営まれ、溝1が機能するということになろう。

土壙の性格は、方形の掘方、ある程度の方向性、土師皿の集積、銅錢のまとまった出土等を考えると、墓壙の可能性が高い。

遺物で注目されるものの一つに周防系とされる足鍋、擂鉢があげられる。出土したものは岩崎編年の足鍋III類、擂鉢IV類に限られるようで、博多、有田・小田部で出土する状況と一致する。ただし、今回の調査では出土数が多いだけでなく、足鍋と土師質の鉢（土鍋）の比（注1）は7.4対2.6であり、煮沸具の組成中の主体を占め、特殊な出土状況を示している。この土器は、しばしば大内氏の支配との関連で語られる。15世紀末から16世紀前半は原田氏が大内氏と最も親密な関係を持った時期であり、その遺物が多く流入する事は考えられるが、志摩郡は大友氏の支配下にあった地域であり大内氏の勢力という側面のみでとられることができない面もある。(堀尾1997、佐藤1998) いずれにしても、本調査地点の性格に深く関わるものと考えられる。

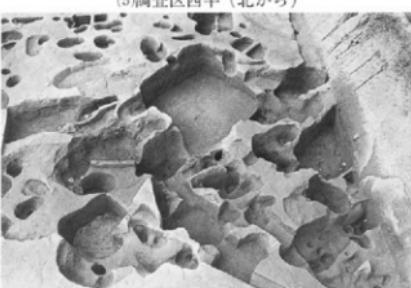
注1) 口縁部片数を単純に数えたものの比で、同一個体等の検討は行っていない。

佐藤信1998「周防型瓦質土器の分布とその背景についての検討メモ」[七隈三十五号]福岡大学歴史研究部

堀尾孝志1997「北部九州における周防型瓦質擂鉢の流通とその背景」[中世土器の基礎研究VI]

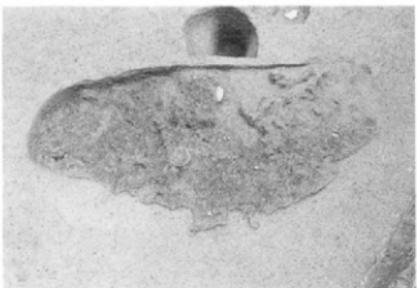
吉留秀敏2000「遺跡分布から見た昭和石器文化」[九州の昭和石器文化Ⅱ]九州旧石器文化研究会

表1 出土上坑一覽





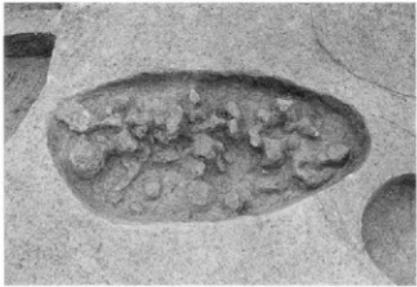
(1)溝 1 から 5 (北から)



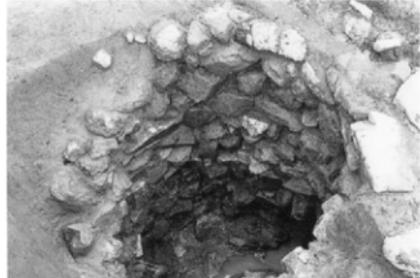
(5)SK201 (北西から)



(2)溝 1、3 (南から)



(6)SK203 (東から)



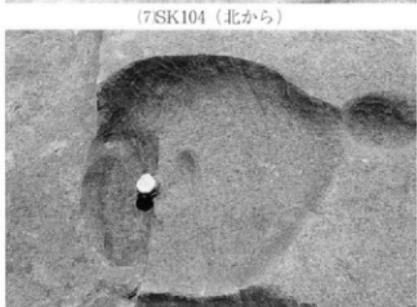
(3)井戸366 (東から)



(7)SK104 (北から)



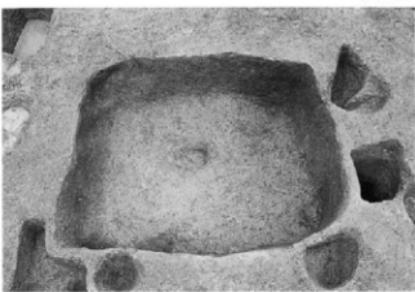
(4)SX491 (北から)



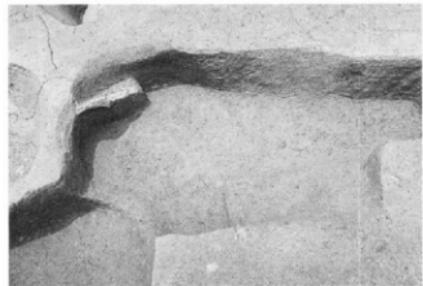
(8)SK301 (西から)



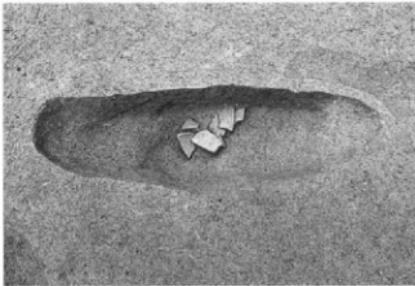
(1)SK306



(5)SK339（南西から）



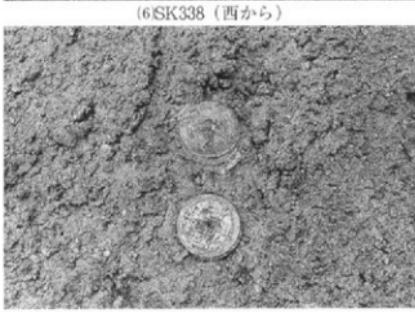
(2)SK318（東から）



(6)SK338（西から）



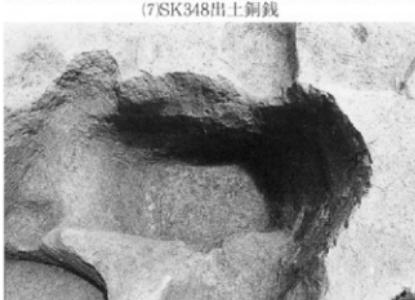
(3)SK329（南西から）



(7)SK348出土銅錢



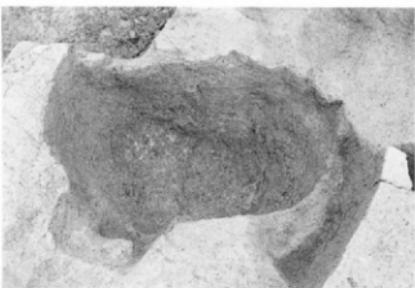
(4)SK435出土繊維状



(8)SK403（西から）



(1)SK415 (東から)



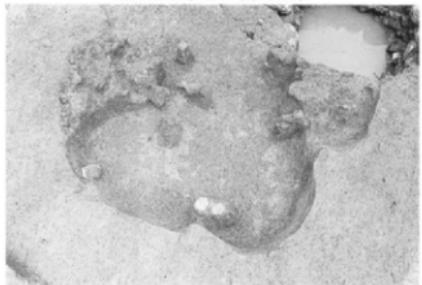
(5)SK454 (北から)



(2)SK427、454 (東から)



(6)SK454 (東から)



(3)SK430、556 (北から)



(7)SK483 (東から)



(4)SK442 (南から)



(8)SK483西半 (東から)



(1)SK502~505 (南から)



(5)SK564、542 (北東から)



(2)SK499 (東から)



(6)SK547 (南西から)



(3)SK503 (西から)



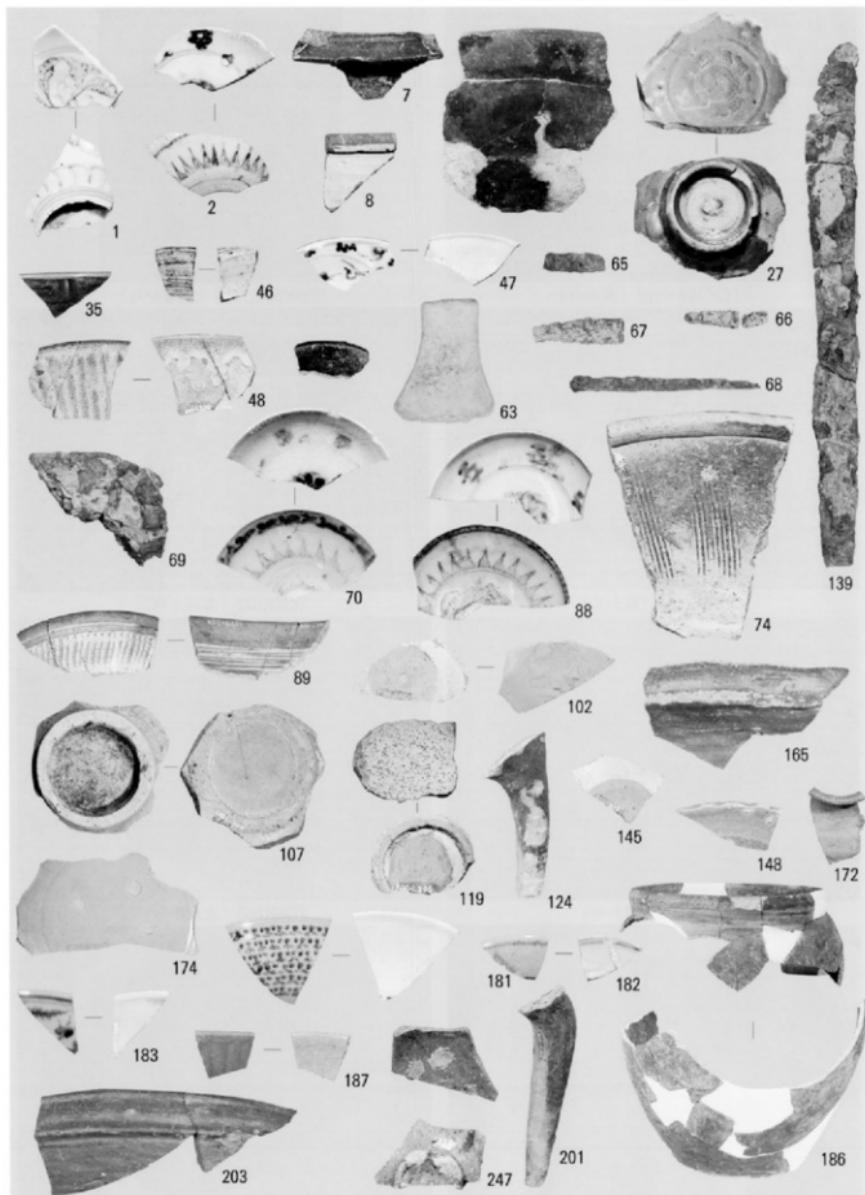
(7)SK563 (北東から)



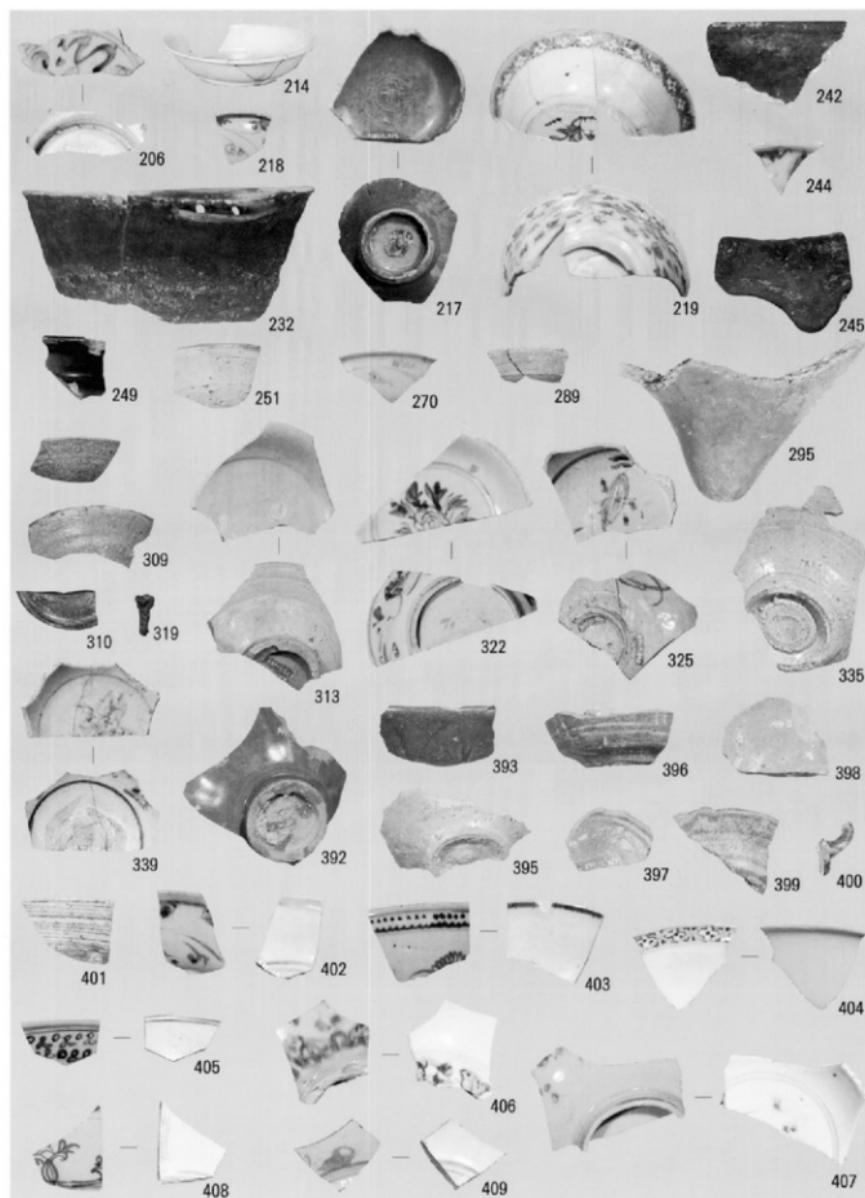
(4)SK546 (南から)



(8)SK586 (北東から)

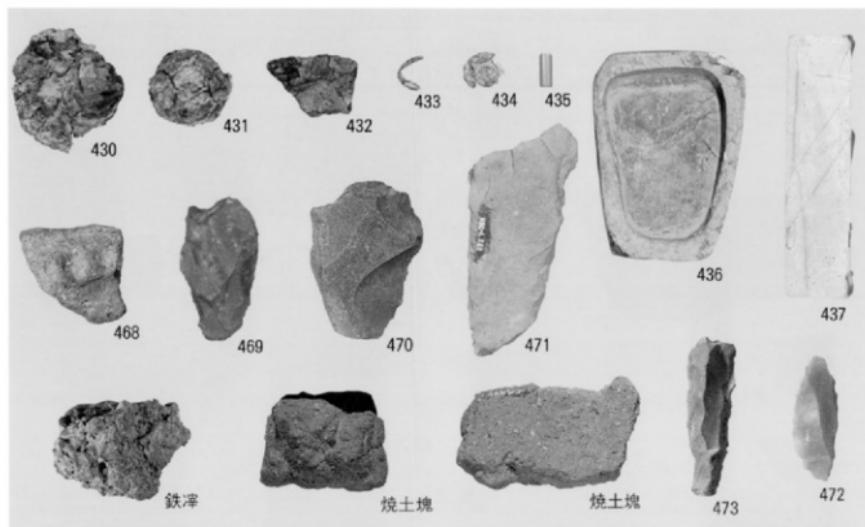


出土遺物 1



出土遗物 2

図版 8



SX499



SX499



SK415



出土遺物 3

小田 C 遺 跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第656集

2000年（平成12年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
(092) 711-4667

印刷 秀巧社印刷株式会社
福岡市南区向野2-13-29
(092) 541-5661

福岡市埋蔵文化財調査報告書第656集

『小田C遺跡』

付 図

小田C遺跡1次調査全体図（1/100）